

【資料紹介】

速水宗達写『竜宝山大徳寺境内并諸塔頭雜記』

——大徳寺塔頭に関する絵画の筆者と諸情報——

杉本欣久

はじめに

一昨年、京都帝国大学文科大学の初代学長・狩野亨吉（一八六五～一九四二）が収集した東北大学附属図書館所蔵「狩野文庫」のなかから、『檀山先生門人姓名録』との一書を翻刻紹介した<sup>1</sup>。同書は、江戸後期に下野黒羽を中心に活躍した神職で画家の小泉檀山（一七七〇～一八五四）に関する「門人録」である。美術史にあつてはやや地方色が濃いと懸念を抱いたものの、近江商人との関係や一四〇名あまりの門人を擁した画系の継承という文化伝播の様相が垣間見えたこともあり、予想外の反響をいただいた。そこで改めて同図書館が所蔵する美術史関係資料の紹介を自身の務めと確認し、本

稿では『竜宝山大徳寺境内并諸塔頭雜記』という資料を取り上げることとした。

本資料については、「変体がな」講読授業のテキストとして寛政十一年（一七九九）刊行の『都林泉名勝図会』を選んだのを機に、京都の寺院に描かれた襖絵に関する資料はないかと検討した結果、存在を知るに至った。その名からもわかるとおり、京都市北区紫野に所在する臨済宗大徳寺派大本山の「大徳寺」に関する一書である。ただし、「狩野文庫」ではなく「茶博士速水宗達稿本」という古文書一括に含まれる。同図書館には、ほかにも『竜宝山大徳寺虫払覚』『竜宝山諸塔頭障壁画工各記』といった書も収蔵されているとわかった。大徳寺は筆者とも少なからぬ縁がある。かつて高校生活を過ごし、たのは、その塔頭・大光院と瑞源庵の跡地に建てられた京都市立紫

野高等学校であった。孤蓬庵との境界になる西端の土地で行なったクラブ活動の際には、木々の生い茂った地面から瓦の破片が顔をのぞかせていたと記憶している。それは明治に廃絶した瑞源庵の建物に葺かれていた一部のはずだが、当時はそのようなことに想いを馳せるなどは一度もなかった。その瑞源庵には桃山時代の画家で雲谷派の祖・雲谷等顔の次男であった等益(一五九一―一六四四)が、一方、いまは校舎が聳える大光院には幕府御用絵師・中橋狩野家の初代にあたる狩野安信(一六一三―八五)が、客殿の襖に絵筆を揮ったわけである。

そのような往時の様相を伝える資料として、大徳寺の塔頭・真珠庵に伝来した『宝山誌鈔』(享保五年・一七二〇写)と『紫野大徳寺明細記』(文化八年・一八一一写)が早くから知られている。特  
に前者は、大徳寺塔頭の襖絵に触れる際には最も頻繁に引用される基礎資料である。その内容が広く供されるに至ったのは、サントリ―美術館における一休禅師五百年遠忌「大徳寺真珠庵名宝展」(一九八〇年開催)にともない、『サントリ―美術館二十周年記念論集』の誌上で榊原悟氏が翻刻されたのによるところが大きい。<sup>2)</sup>

ただし、同様の内容を有する資料が他に存在することについては、すでに土居次義氏が指摘されている。<sup>3)</sup> これまで大徳寺の襖絵に言及する際にはほとんど『宝山誌鈔』と『紫野大徳寺明細記』、もしくは『都林泉名勝図会』が踏まえられてきたが、同様の資料が存在す

る以上、なるべく多くを俎上に載せたうえで、それぞれの特性を相互批判的に把握しておくべきであるのは論を俟たないだろう。『宝山誌鈔』と『紫野大徳寺明細記』の翻刻から四十年が経過したこともあり、時代の要請はさらなる資料の発掘に加え、個々の詳細な分析にあると考える。そこで今回は『竜宝山大徳寺境内并諸塔頭雑記』を翻刻し、諸書との違いやそれぞれの傾向に言及したうえで、本資料の特徴を明らかにする。室町後期から江戸前期にいたる画家研究の一助となれば幸いである。

#### 一 『竜宝山大徳寺境内并諸塔頭雑記』の

##### 概要と書写者・速水宗達

本資料を紹介するにあたり、まずはその概要と書写者の速水宗達について触れておく。

東北大学附属図書館には、「準貴重書」の古文書として一括収蔵される「茶博士速水宗達稿本」五二九点がある。これまでに公刊された茶道関係の書籍や論文において、狩野亨吉が収集した「狩野文庫」の一部と誤解されているが、京都三条寺町にあった書肆・開益堂の細川清助氏から昭和十二年(一九三七)三月に購入された資料群である。<sup>4)</sup>

江戸中期の茶道資料として重要な内容を含むものの、裏紙を用い

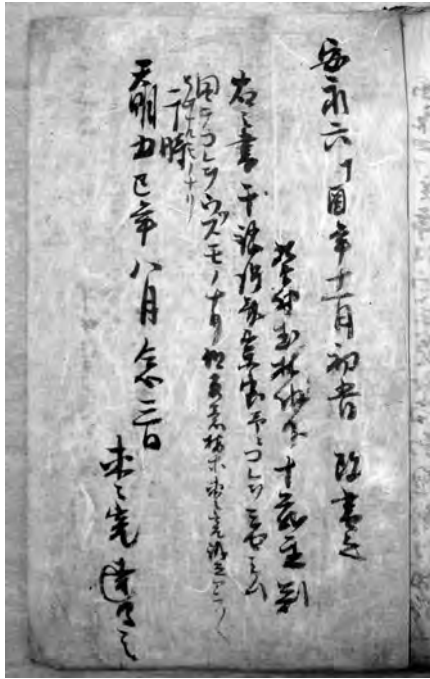


図2 『竜宝山大徳寺境内并諸塔頭雑記』  
16丁オモテ

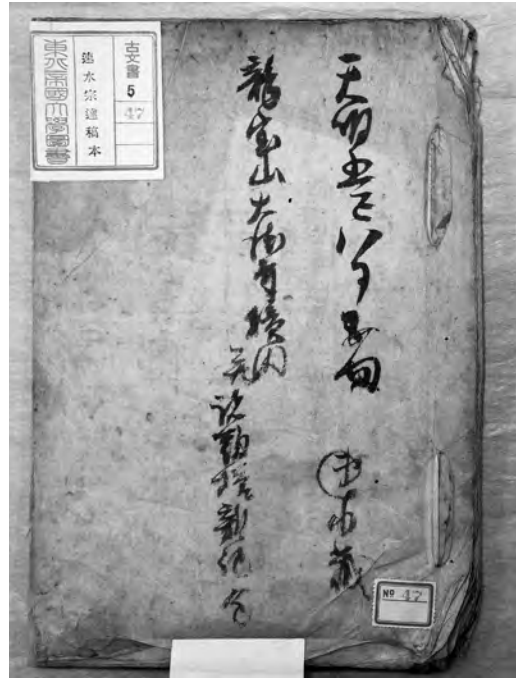


図1 『竜宝山大徳寺境内并諸塔頭雑記』表紙

た走り書きの類が多いのに加え、宗達特有の癖のある筆跡も相まって通読の困難な資料も少なくなき、これまで茶道史研究以外ではあまり注目されてこなかったとみられる。

このうち「四七」の番号が付され、冊子として比較的体裁が整ったのが本資料である。縦二四・八センチメートル、横一七・〇センチメートルの袋綴で、表紙、裏表紙とも同様の紙を用い、全十六丁をこよりによって綴じる大和綴とする。

表紙中央に「龍宝山大徳寺境内并諸塔頭雑記 全」と墨書し、その右に「天明五巳八月下旬 速水蔵」と記す(図1)。

一方、十六丁オモテには、

安永六丁酉年十一月初五日 改書之

紫野玉林衲下 十蔵定判

右之書十認得齋宗室子ニコレヲミセシム

因テコレヲウツスモノナリ、但反意按等、東々完調立アラク

如此ナルモノナリ

于時

天明五巳年八月念三日

東々完 達写之

との奥書がある(図2)。

綿菘北禮 昂重低輕  
磨之琢之 維瓊維瑩  
風雷鼓動 剛中成亨  
徵之不朽 永世有聲



図3 望月玉川「速水宗達像」  
速水流家元・速水滌源居 所蔵

この「速水蔵」と「束々完達」の記から、天明五年（一七八五）八月二十三日に速水宗達自らが書写したものと判明する。

速水宗達（一七四〇～一八一〇）は京都の人で、医者・速水玄達の子として生まれた<sup>5)</sup>。名を龜次良のちに和道、字を希棟といい、宗達、束々完などと号した。第一一九代光格天皇の弟であった聖護院宮盈仁法親王から「養寿院」を賜号されたほか、一条道香から庵号の「滌源居」を賜ったという。茶を裏千家八代の一燈宗室（一七一九～七二）に学び、その理論や歴史を説いた代表的な著作として、没後の刊行であるが、文化八年（一八一二）刊の『茶旨略』、文政八年（一八二五）刊の『喫茶指掌編』、安政五年（一八五八）

序の『茶則』などがある。本資料も塔頭襖絵の筆者のみを書き留めたのではなく、茶人が造作した石灯籠や棚などの趣向について、宗達自身の手による追記がところどころに認められる。

奥書から本資料の書写経緯が明らかとなる。安永六年（一七七七）に大徳寺の塔頭・玉林院の僧が写したという原本を、裏千家九代家元・石翁宗室の長男で、のちに十代を継いだ当時十六歳の柏叟宗室（認得斎・一七七〇～一八二六）から示され、それを宗達が転写したとする。

速水宗達と柏叟の交流については、そもそも宗達が先々代・又玄斎一燈（八代・一七一九～七二）や先代・不見斎石翁（九代・一七

四六（一八〇二）の有力な門弟であり、享和元年（一八〇二）に行われた柏叟の家元継承の際には立ち合い人として参加するなど、同門の初代狩野宗朴（一七四八〜一八一八）とともにその育成を支えた人物として知られる。<sup>6)</sup>

また、柏叟と玉林院の間にも深い縁があった。先々代の一燈が大徳寺三四一世で玉林院八世の大龍宗丈（一六九四〜一七五二）に参禅しているほか、一燈の叔父・龍門宗禹（？〜一七四八）が玉林院九世となっている。また、宗達に原本を示した天明五年時の住持は、大徳寺三七八世で玉林院十世の無学宗衍（一七二一〜九一）であり、柏叟の父・石翁は無学から「石翁」の道号を与えられている。一方、柏叟自身も寛政七年（一七九五）に大徳寺四〇七世、玉林院十一世となった大順宗慎（一七四七〜一八二五）から「柏叟」の道号を与えられたほか、当時七歳であった柏叟の息・閑田宗一（一七八六〜一八一二）が寛政四年（一七九二）にその法嗣となって入寺している。ただ、この宗一は二十六歳で早逝したため、玉林院を嗣ぐことはなかった。現在でも、同寺では「常楽会」の名で追善の茶会が催されているとのことである。

一方、この「茶博士速水宗達稿本」の古文書群には、表紙に「天明五己巳年八月写」と記される、ほぼ同時期に書された『竜宝山大徳寺虫弘覚』という資料が認められる。『竜宝山大徳寺境内并諸塔頭雑記（以下『雑記』）』に続く「四八」の番号が付され、大徳寺諸

塔頭の曝涼にもなう書画の記録となっている。中国絵画や墨蹟などの記載が多く、同寺に伝来したそれら作品に触れる際には参照すべき資料である。これに類する資料として、京都府立京都学・歴史館所蔵の『龍寶山大徳禪寺諸寺院蟲拂記』（和〇六二一）<sup>7)</sup>、東京国立博物館『大徳寺虫干之図』（和三八二）と国立国会図書館『大徳寺虫干之図』（八三二一―二三三）が挙げられる。後者の両書はそれぞれ書体が異なるにもかかわらず、ともに「文化十四年丑八月写之」の奥書を有することから、これに遡る原本の存在が想定される。

また、『国書総目録』には「東北大学（雑華院資料の内）」として『竜宝山諸塔頭障壁画工各記』という一書が掲載される。所在を確かめたものの見出すことができなかったため、同図書館に調査いただいたところ、残念ながら「雑華院資料」と冠された資料群は先の大戦により焼失したとの回答が得られた。

## 二 同様の内容を有する資料について

本資料の特徴については、同様の内容を有する資料と比較したうえで提示するのが最も適切と考え、先に挙げた『宝山誌鈔』『紫野大徳寺明細記』『都林泉名勝図会』に加え、『国書総目録』掲載資料を書名に基づいて検索し、三書をその対象に選んだ。

以下、末尾に掲げた異同一覧表の順番に基づき、諸書の概要を示

しておく。

a 『紫野大徳寺明細記』文化八年（一八一二）写

真珠庵所蔵

右、京紫野大徳寺并諸塔頭、開祖檀越間之画筆諸名蹟之記一卷、寸松庵

文蔵之書也、借之騰写納牧羊軒書櫃

文化八年辛未年十月下旬誌

界府 半井宗珠珍蔵

と奥書にあり、大徳寺塔頭の寸松庵に伝来した一書を、文化八年（一八一二）に半井宗珠が書写したものと判明する。

半井宗珠（？〜一六七六）とは、医学を修め、茶人としても知られる養竹軒と号した半井云也（卜養奇雲・一五六八〜一六三六）の子で、幕府医官となった江戸半井家・卜養慶友（雪嶺宗松・一六〇七〜七八）の弟である。ただし、この宗珠は堺半井家の四代であり、その後の九代目も同じく宗珠と名乗っていることから、書写は後者によるとみられる。「牧羊軒」とは普通の「卜養」にちなみ、堺半井家で代々受け継がれた号である<sup>8)</sup>。

堺半井家と寸松庵の縁については、云也の一子が大徳寺第百九十五世の寸松庵二世として入寺した翠巖宗珉（一六〇八〜六四）であり、母方（津田宗及娘）の伯父で大徳寺一五六世・江月宗玩の法

嗣となったことに起因する。また、本書を所蔵する真珠庵は御典医・半井本家の墓所であり、伝存する「百鬼夜行絵巻」や書院「通仙院」は桃山時代に活躍した半井瑞策（驢庵・一五二二〜九六）の寄進とされるように、半井家と深い関係のある塔頭であった。

b 『宝山誌鈔』享保五年（一七二〇）写

真珠庵所蔵

表紙に「享保五竜集庚子季林鐘吉旦」とあり、朱文方印「真珠庵蔵書」が捺される。巻末に「芳春院客殿絵」「芳春院下寺家」に加え、大徳寺塔頭の芳春院開祖であった玉室宗珀の師・春屋宗園から七世・雲秀宗台に至る「芳春祖師籍」を掲載する。このことから、本来は芳春院の伝本であったものが書写され、真珠庵に伝わったとみられる。ただし、芳春院七世の「雲秀宗台」の項に「享保六辛丑三月十五日示寂六十三才世寿也」との記載があり、表紙に記された享保五年以降も書き継がれていたとわかる。

c 『紫野大徳寺中客殿画之知簿』

狂歌師としても知られる幕府御家人・大田南畝（一七四九〜一八二三）が、江戸時代の雑著随筆を編纂した『三十幅』に含まれる。三十篇を一輯とし、『三十幅』『続三十幅』『広三十幅』『新三十幅』『補三十幅』の全一五〇篇から成る。享和三年（一八〇三）の序を有し、『補三十幅』『卷十七』には十一代將軍・徳川家斉による『文政五年

五十歳遠奉祝独吟』を収めるため、文政五年（一八二二）前後まで二十年にわたる編纂期間が判明する。ただし、南畝自筆の完本は残っておらず、遺脱のある写本のみが伝わるため、誤字脱字も多く認められる。

一九三九年に大東出版社から刊行された『三十輻』は、国立国会図書館の二本および国立公文書館内閣文庫本を校合したものといい、本書はその「第二巻」に収録される。本稿は基本的に同書に拠ったが、国立国会図書館の「辰四四」と「一二三―二三」という所蔵番号が付された二本のうち、それぞれ『続三十輻 卷十一』に収録される内容を確認して掲示した。

d 『竜宝山大徳寺堂舎便覧宝物記』元文五年（一七四〇）写  
静嘉堂文庫（八七―四五）所蔵

奥書に「元文五年庚申七月廿七日 宗舜書之」とあることから、元文五年（一七四〇）に大徳寺三〇九世・啓叔宗廸の法嗣で、のちに大徳寺三五二世、東海寺女性院五世となった日寛宗舜（一六九九―一七六四）によって書写されたとわかる。『宝山誌鈔』に次いで書写年代が古く、それと異なる独自性を備えた内容には注目すべき点が多い。

e 『都林泉名勝図会』寛政十一年（一七九九）刊  
安永九年（一七八〇）刊の『都名所図会』、天明七年（一七八七）刊の『拾遺都名所図会』に続く絵入り京都名所案内書で、数多くの名所図会を手掛けた秋里籬島によって刊行された。その名のとおり、各寺院の庭園について詳述するが、一方で寺宝の詳細にも触れている。大徳寺諸塔頭に関する襖絵について、『宝山誌鈔』が広く知られる以前は本書に多くを拠っていた。

f 『竜宝山大徳寺堂舎宝物記』書写年代不明

静嘉堂文庫（八七―四五）所蔵  
dと同じ番号が付されるが、筆跡や体裁は異なり、内容にも無視できない独自性が備わる。ただ、残念なことに書写者、書写年代を示す記載はない。

### 三 『雑記』にみる内容の特徴

以上のaからfまでの六点と本資料にみる大徳寺塔頭の客殿筆者について、異同一覧表を作成して本稿の末尾に掲げた<sup>9)</sup>（表1）。次にその比較を通じて本資料の特徴を抽出していくが、まずは理解の便を得るため、現存最古の方丈建造物と認められる文亀二年（一五〇二）創建の龍源院を例とし、客殿（方丈）各室の配置と用途につ

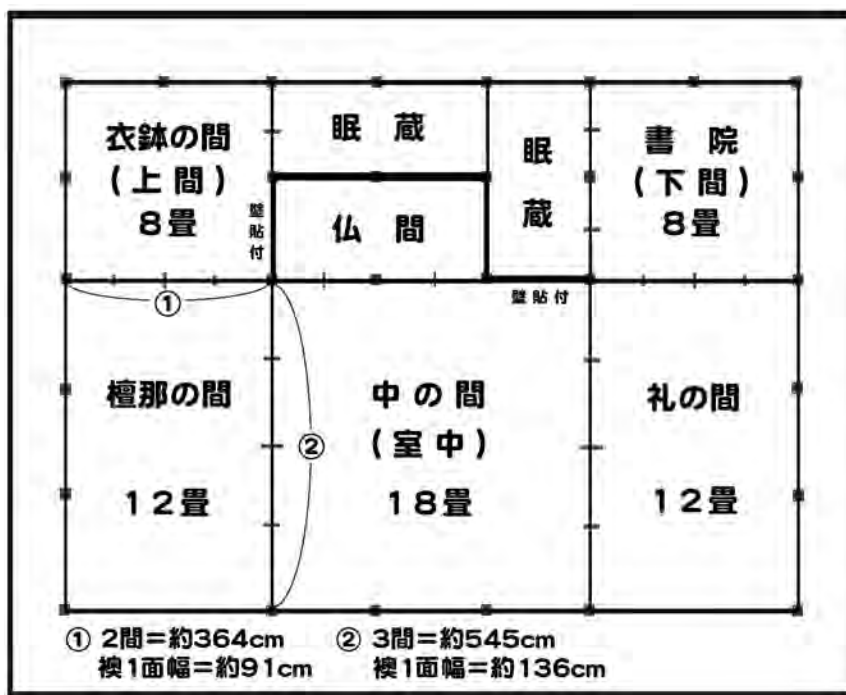


図4 大徳寺塔頭・龍源院客殿平面図

いて確認しておきたい。<sup>10)</sup>

客殿（方丈）は禪宗寺院における塔頭の主要建造物で、仏堂と住持居室を兼ね備える（図4）。

南向きに建造するのが慣例であり、住持が諷経礼拝を行ったり、法要儀式を執り行う中央南側に位置する室を「中の間」もしくは「室中」という。板敷の床に、左右と角のみ「コ」字形に畳を敷く。これを「拭い板敷」「回畳」という。

その北側、襖を隔てた奥の室を「仏間」もしくは「真前」といい、仏壇（仏壇）を安置し、正面と左右を壁で塞ぐ。さらに北裏側にある室を「眠蔵」といい、住持が就寝や座禅を行う場もしくは納戸として用いる。

南面する「中の間」の東西いずれかの室を、八畳もしくは十二畳に相当する「礼の間」「檀那の間」とする。古式では東に玄関を設けるため、上座となる奥の西室を「檀那の間」、下座となる手前の東室を「礼の間」とする。近世になると西に玄関を設けることが多くなるため、それぞれの位置が逆となる。上座の「檀那の間」は塔頭の支援者である檀那（檀越）が参拝の際に滞在する室、下座の「礼の間」は檀那の従者などが拝礼する室である。ただし、普段は住持と僧侶などが集会する場として使用される。

上座となる「檀那の間」の北側は六畳もしくは八畳に相当する室とし、「衣鉢の間（衣鉢閣）」または「上間」という。一方、下座と



なる「札の間」北側も同じ大きさの室とし、「書院」または「下間」という。前者は役僧が日常生活を送る居間、後者は住持の居間となる。

このように各室における格や用途の違いに応じ、襖絵の画題や画家の担当も決定されたはずである。また、画面となる襖の幅も各室の大きさによって自ずと決まる。六畳は一間半と二間、八畳は二間四方、十二畳は二間と三間、十八畳は三間四方であり、おおむね一間半（九尺）は二七三センチメートル、二間（十二尺）は三六四センチメートル、三間（十八尺）は五四五センチメートルに換算される。襖四面を設置したとすれば、一面あたりの幅はそれぞれ六十八、九十一、一三六センチメートルとなる。それゆえ、建造物から遊離した襖であっても、一面の幅からおよそ室の大きさや設置場所を類推することが可能となる。

なお、大徳寺山内における塔頭の位置については、文政八年（一八二五）に発行された『龍宝山大徳禅寺山内図』を本稿の末尾に掲げたので、そちらを参照されたい<sup>11</sup>（図A）。

### ① 『雑記』のみに記載される情報

初めに『雑記』のみに認められる情報について記していく。

まず、多くの作品が現存する玉林院について、「松に猿猴」「竹に双鶴」「麝香猫」とする画題の「杉戸絵」筆者を、他書が「不知」とするのに対して「沼津紹玄」との名を挙げる。江戸時代の画家伝

にこの名を認めることはできないが、「沼津」を名乗る画家についてはいくつかの資料に散見される。

寛文十二年（一六七二）刊行の『弁玉集』「巻二」には、狩野内膳の系譜として「乗昌 沼津」の名を挙げ、その後継として「乘天」と記す。続く延宝初年（一六七三）頃の成立になる『画工便覧』「巻第五」には、「永徳法印門人」の項に「乗昌」の名があり、

沼津と号し、京師に住す、永徳を師とし、後に一家を成す。而して花鳥人物草木を図す。世に沼津絵と云。其の子、乗天と号し、ますます画功を成す。

と少し長めの説明を付す。また、元禄六年（一六九三）の跋を有する『本朝画印伝』「巻下」にも「乗昌 古右京門弟、洛の四条に絵所屏風あり」とあるほか、正徳年中（一七一〜一六）成立とされる『扶桑名工画譜』は、

沼津乗昌、京師に住す。永徳を師とし、後一家を成す。花鳥人物草木を画く。世に沼津絵と曰う。沼津乗天、乗昌の子、画を善くす。

と記している<sup>12</sup>。

このように江戸前期には狩野派に属する沼津乗昌、乗天という二代にわたる画家の活躍が知られるものの、乗昌の師については狩野松栄の息である狩野永徳（二五四三～九〇）、同じく松栄の門人である狩野内膳（一翁・一五七〇～一六一六）、「古右京」こと永徳の長男・狩野光信（二五六五～一六〇八）というように、諸書の間で一致をみない。さらに幕府御用絵師・木挽町狩野家に生まれた朝岡興禎（一八〇〇～五六）の『古画備考』「巻四十 狩野門人譜一」は、「祖西門人」つまり松栄および永徳の弟子で猿屋町地狩野家の初代・狩野秀信（二五五六～一六一八）との別説を掲げる<sup>13</sup>。

ただ、乗昌が狩野永徳の次世代に活躍したとみるのは一致するところであり、時代は下がるものの、文化十五年（一八一八）刊の『本朝古今書画便覧』は、

狩野永徳重信の門人、沼津氏、京師に住す。専ら屏風の絵を画くを以て屏風絵所、又沼津屏風と云、寛永十八年に没す。

とし、その没年を寛永十八年（一六四一）と伝えている。

杉戸絵の筆者である「沼津紹玄」も、この乗昌、乗天の流れを汲む画家であったと想定でき、「絵所屏風」や「沼津絵」との記述が認められたように、主に屏風制作を得意とした画系と知られる。末流の活動については、

乗昌 沼津氏、専ら屏風絵を画くを以て沼津屏風と称して、子孫京師四条に住し、屏風絵所と云、画を古右京に学て一風をなせり。

と天明七年（一七八七）版『新撰和漢書画一覽』に記されるほか、早く正保二年（一六四五）刊の『毛吹草』「巻第四・諸国より出る古今の名物」には、「山城・四条」に「沼津屏風（ヌマヅノビヤウブ）」と見える<sup>14</sup>。また、貞享元年（一六八六）の序を有する京都の地誌『雍州府志』「巻七・土産門」にも、

屏風、所々にこれを製造す。特に四条通り沼津某の家、両曲、六曲、大小の屏風、撒金墨画、好む所に随てこれあり。

とあり<sup>15</sup>、さらに貞享五年（一六八八）の序を有する浮世草子『正月揃』には、「第七 洛中洛外諸職諸商人の正月附たり名物揃」に「四条沼津の屏風」との記述が認められる<sup>17</sup>。十七世紀後半の京都ではかなり知られていたらしく、このことについて有職故実家の多田南嶺（一六九八～一七五〇）は、『秋斎随筆』「壺之巻」で「沼津といふ屏風之事」との一項を掲げている<sup>18</sup>。

中古の町絵の屏風師なれども、あれが本姓を其身はじるまじ



図5 多田南嶺『絵本花の鏡』寛延元年(1748)刊

けれども、滝野といふ氏にて、東海道沼津のものにて、沼津の脇に小山あり。松竹生茂りて絵にかける蓬莱山のごとし。其小山の下より大なる亀出て海に入、是を滝野氏見とめて其山の図を写して屏風に書あらはして鎌倉の宗尊親王へ奉給、此親王は後嵯峨院の皇子にて征夷大將軍に成て鎌倉にまします時也、去によつて是より彼屏風の絵、日本国の諸大名婚礼の時、かならず沼津が宝来の屏風とて用ひられたり。瀧野何某は都に登つて終に屏風の司となる。今の沼津屏風の家なり。されども両家に別れて一家は先祖の通り武士を立、禁中の御遣番の内に瀧野何某とて有、屏風の方には沼津と計、覚へて居る体に見へたり。

また、同じ南嶺の寛延元年(一七四八)刊『絵本花の鏡』では、「此山をうつして世に是を沼津絵のはじめとす」と「蓬莱山図」に関する説明を加える(図5)。

果たして後嵯峨天皇(一二二〇〜一二二七)や宗尊親王(一二四二〜一七四)の時代まで遡る伝統があったかは定かでないものの、沼津氏が早くから屏風制作に携わっていたことは事実らしく、四条通りに面した店舗において上記のような由緒を宣伝材料にしていた可能性が窺える。

次に同じ玉林院に関し、寛保二年(一七四二)に豪商の四代鴻池善右衛門(了瑛・一六九〇〜一七四五)によって寄進された位牌堂



図6 大徳寺塔頭・玉林院南明庵内部正面

「南明庵」について、その襖絵の筆者が「狩野栄川」であったと伝える。現存する仏壇前の襖四面には「天台石橋図」が描かれ、右上部に、

天台石橋図 狩野典信所図檀越

医官法眼宗己寄置之蓋明和己丑

中秋十七日於 東都城中画之

との記が認められる(図6)。ここから、幕府奥絵師・木挽町狩野家六代の狩野栄川典信(一七三〇〜九〇)による明和六年(一七六九)の作と知れる。

そもそも同塔頭は、慶長八年(一六〇三)に幕府奥医師・養安院家の祖である曲直瀬正琳(一五六五〜一六一一)によって創建された。六年後の火災にもなつて再建され、その際に名の一字「琳」をわけて「玉林院」と改められた。「寄置之」と記される注文主の「檀越医官法眼宗己」とは、宝暦十一年(一七六一)から天明元年(一七八一)まで法眼位にあつた正琳から五代のちの曲直瀬正山(一七一九〜一八〇一)とみられる<sup>(21)</sup>。荻生徂徠の門人として知られる越智雲夢(養安院五代・一六八六〜一七四八)の次男である。本資料の原本が書されたのは安永六年(一七七七)であるが、それより八年前に描かれた「南明庵」の襖絵について記載があるのは重要である。

同塔頭の伝本であるから、他よりも詳細に記されるのはむしろ当然であり、内容についてもある程度の信憑性が保障されよう。

この曲直瀬家に関しては、先に挙げた画家・沼津乗昌とも縁があった。曲直瀬正琳は曲直瀬正盛（初代道三・一五〇七〜九四）に医学を学び、その養子であった正紹（二代道三・玄朔・一五四九〜一六三二）の娘と結婚し、曲直瀬の姓を与えられた。この正紹の肖像を沼津乗昌が描き（図7）、先代である曲直瀬正盛を狩野貞延、正紹から三代のちの曲直瀬親俊（玄淵・一六三六〜八六）を狩野常信がそれぞれ手掛けている。<sup>29</sup> なお、曲直瀬家の系譜によると、正琳の娘が「沼津乗賢」という人物に嫁いでおり、その間にできた玄理（は



図7 沼津乗昌「曲直瀬正紹（玄朔）像」  
寛永8年（1631）

るみち・一六〇四〜六七）は、正琳の後継者で早逝した正圓（一五八八〜一六一六）の遺跡を継いでいる。<sup>28</sup> 曲直瀬家に入ったのちは元和四年（一六一八）の十五歳時に二代將軍秀忠に初御目見し、寛永六年（一六二九）に法眼に叙せられたが、玄理はもともと「沼津」氏であり、初め「乗昌」と名乗っている。曲直瀬正紹の肖像画は、当人が没年する寛永八年（一六三一）に沼津乗昌によって描かれ、画面上部には当人よる同年五月の賛が認められる。当時、玄理は二十八歳であった。医業と画業という職種の違いから見ても、曲直瀬玄理が沼津乗昌と同一人物だとは言えないものの、「沼津」というさほど多くはない氏と「乗昌」の名が一致するのも奇異である。手近な資料にその名を見出すことはできないが、父である「沼津乗賢」は「紹玄」とも音が近く、その素性は注目されるところである。今後の検討を俟ちたい。

さて、次に明治維新時に焼失した正受院の「書院」を挙げる。<sup>29</sup> その「墨絵山水」について、宮中絵所預であった土佐派の嫡流・土佐光成（一六四六〜一七一〇）とその子土佐光高（光祐・一六七五〜一七一〇）の筆と記している。「中の間」における「墨絵列仙」「礼の間」と「檀那の間」における「墨絵山水」の筆者は、狩野光信門人の狩野興以（？〜一六三六）、狩野探幽の娘を妻とした狩野素川信政の男・狩野寿石（寿碩・一六三九〜一七一八）、狩野尚信門人で肥前平戸藩御用絵師となった片山尚景（一八二八〜一七一七）と

し、諸書の間でも一致するところである。これらの記述が正しいとすれば、「中の間」のみが十七世紀前半、他は十七世紀後半から十八世紀初頭に描かれたことになる。

また、天保年中（一八三〇～四四）に倒壊し、明治十一年（一八七八）に黄梅院に合併廃絶した昌林院について、「衣鉢の間」における「墨絵花鳥」の筆者を、中橋狩野家初代安信（一六二三～八五）の長男であった狩野時信（一六四五～八一）とする。他の「中の間」「礼の間」「檀那の間」が安信の筆であることは諸書で一致しており、最も格式の低い「衣鉢の間」を時信が手掛けたとしても矛盾はない。時信は三十七歳で没しており、本客殿の作画が同時期に行われたとすれば、自ずと年代は十七世紀後半に限定される<sup>26)</sup>。

最後に、大徳寺塔頭の最北端に位置し、明治十一年（一八七八）に三女院に合併廃絶した大源庵の客殿一式について、長州藩祖・毛利輝元の御伽衆として仕え、雪舟の遺跡・雲谷庵と『山水長巻』を継承した雲谷派の祖・雲谷等顔（一五四七～一六一八）の筆とする。ただし、同庵は等顔没後の元和八年（一六二二）、近江の浅井氏出身という正栄尼（本姓は横井）が玉室宗珀のために創建したと伝えらる。等顔の筆とすれば事前に仕上げられていたか、他所から移設されたとみななければならない。安政二年（一八五五）に刊行された『竜宝山大徳禅寺世譜』には「問之絵一式等益」とあり、等顔の次男であった等益（一五九一～一六四四）の筆であることを伝える<sup>27)</sup>。

②『雑記』とa『紫野大徳寺明細記』のみに記載される情報  
 玉林院伝本の本資料と寸松庵伝本のa『紫野大徳寺明細記』の近似性は、改めて後で触れる。他書にはない記述が、この両書にのみ認められる場合がある。

まず、明治十一年（一八七八）に本寺の大徳寺に合併廃絶し、のちに再興された総見院について、「中の間」「礼の間」「檀那の間」の筆者は諸書で一致をみるが、格式の低い「衣鉢の間」と「大書院」それぞれの画題を「墨絵山水」「墨絵山水松」と記し、能登七尾出身で京都で活躍した桃山時代の長谷川等伯（一五三九～一六一〇）によるとする。つまり、この両書のみ、客殿すべての水墨画を等伯ひとりの手になると伝える。

次に、明治維新後に廃絶した碧玉庵について、「中の間」「礼の間」を雲谷等顔、「檀那の間」「大書院」を雲谷等与、「衣鉢の間」を雲谷等益の筆とする。雲谷派の祖・等顔（一五四七～一六一八）に加え、その次男・等益（一五九一～一六四四）、さらにその長男・等与（一六一二～六八）三代にわたる作画とみるが、等顔と等与の年齢差を考慮すると一時に描かれたとはできない。ただし、安政二年（一八五五）に刊行された『竜宝山大徳禅寺世譜』は、「問之絵中（渭陽狩図）等顔、西等益等輿両筆、東等的」と記している。等顔は「中の間」のみ、等益と等与は「西」つまり上座の「檀那の間」と「衣鉢の間」、さらに等顔の長男であった等屋の息・等的（一六〇六～

六四)が「東」の「札の間」と「大書院」を担当したとする。

最後に、明治十一年(一八七八)に龍光院に合併廃絶した看松庵の客殿一式について、狩野探幽の弟で木挽町狩野初代の狩野尚信(一六〇七〜五〇)の筆であると、両書のみが伝える。

### ③ b 『宝山誌鈔』と対立する情報

大徳寺塔頭の襖絵筆者に関して常に典拠とされるのはb『宝山誌鈔』であるが、その記述と対立する内容を掲げる。ただし、いずれについても、最も近い内容を有するa『紫野大徳寺明細記』には認められない。

まず、文政十三年(一八三〇)八月十九日に発生した直下型大地震で半倒壊し、その後に襖絵が散逸した大慈院について、bが雲谷等益とするのに対し、長谷川等伯の筆と記す。

また、文化十三年(一八一六)の龍翔寺の火災にもなって延焼し、のちに再興された大光院について、bが狩野探幽の養子で駿河台狩野家初代・狩野益信(洞雲・一六二五〜九四)とするのに対し、探幽末弟で中橋狩野初代・狩野安信と記す。

以上の対立する二つの内容については、e『都林泉名勝図会』が本資料と同じ説を採用する。

さらに龍光院について、bが長谷川等伯、本資料が雲谷等顔、龍翔寺について、bが小栗宗湛、本資料が小栗宗栗としており、ここ

にも対立が認められるものの、この両寺に関しては諸書においてもかなりの混乱が認められる。すでに襖絵が散逸している現状下においては、より詳細な資料が見出されないかぎり、それぞれの正否を判断するのは困難である。

### ④ 後補に関する情報

b『宝山誌鈔』やe『都林泉名勝図会』は当初の筆者のみに終始するが、本資料やa『紫野大徳寺明細記』、f『大徳寺堂舎宝物記』は後世の画家による後補の情報も記載している。

まず、明治十一年(一八七八)に徳禅寺に合併廃絶し、近年に再興された如意庵について、「中の間」における「墨絵山水」および「檀那の間」における「墨絵西湖ノ図」を狩野元信の筆とする。これは諸書の一致するところであるが、本資料はさらに後者に関して、「南二枚雨気 探幽カキタス也」と書き添える。また、前者に関してaは「北四枚探幽斎筆」、fは「北之方書足シ」「同(狩野) 探幽守信筆」とし、後者に関してaは「南四枚探幽斎筆」、fは「南之方書足シ」「同(狩野) 探幽筆」と記す。本襖は明治の廃絶を機に体裁を改め、同じ山内にある真珠庵の通仙院に移設されて現在に至っている。<sup>(28)</sup>

探幽による後補の存在が江戸中期の段階において指摘されていた以上、改めて検討する必要が生じよう。現状の同襖(「草山水図襖」

「西湖図襖」に対し、当初の体裁を復元的に想定したうえで、探幽による「北四枚」と「南二枚」もしくは「南四枚」に相当するものが現存しないか、確認することが求められる。

次に襖絵が寺外に流失し、現在はその二十八面が京都国立博物館の所蔵となっている養徳院について、諸書の多数は「中の間」における「墨絵芦雁」を室町幕府の御用絵師・小栗宗湛（一四一三～一四八一）の筆とする。一方、本資料とaはその師である相国寺の画僧・周文とするのに加え、「西四枚小栗宗旦カキタス也」と記し、一部が小栗宗湛による後補であったと伝える。現在の研究では『蔭涼軒日録』などの記述から、宗湛とその息・宗継の手になるとの見方が主流となっている<sup>29</sup>。

最後に、すでに襖絵が散逸してしまった龍源院について、eを除いた諸書が「礼の間」における「薄彩色山水」、「檀那の間」における「墨絵猿猴」を「長谷川等周」の筆とする。ただし、長谷川等伯による『等伯画説』には「紫野ノ龍源院ノ方丈 等春筆也 梁楷ヤウノ大人形 次間ハ和尚ヤウノ猿公也」との記述があり、この「等周」は等伯の養父・長谷川宗清の師であった等春（雪舟門人）の誤りとみられている<sup>30</sup>。同塔頭の創建は永正十四年（一五一七）であるため、およその制作年代も推察される。

本資料はこの名に加え、「礼の間」に「東四枚小栗宗栗カキタシ」、「檀那の間」に「西四枚小栗宗旦カキタシ」と記し、小栗宗湛とそ

の養子といわれる宗栗による後補があったとしている。同様に、aは「中の間」における「薄彩色山水」に「東四枚小栗宗栗筆」、「檀那の間」に「西四枚同筆」、fは「礼の間」における「東の方墨絵山水」に「小栗宗旦筆」、「檀那の間」における「西の方墨絵柳鷺芦翡翠」に「小栗宗旦筆」と記す。aは「中の間」と「礼の間」（墨絵列仙）を逆に取り違えているため、本資料、a、fのいずれもが「礼の間」と「檀那の間」に小栗宗湛もしくは宗栗による後補があったと伝える内容になっている。ただし、両者の活躍時期は等春より先の十五世紀であり、「カキタシ」との記述は誤りである。そこに合理性を求めるとすれば、むしろ古い時期の制作である宗湛もしくは宗栗の作品が混在していたとみるべきだろう。

### おわりに

本資料の概要と特徴について、同様の内容を有する六点と比較したうえで示した。内容の異同を確認する作業過程において、それぞれの記述には粗密があり、書写や伝来に系統らしきものが見えてきたことから、最後にこの点に言及して結びとしたい。

本資料と最も近い内容を有するのは、a『紫野大徳寺明細記』である。前者は玉林院の伝本で天明五年（一七八五）、後者は寸松庵の伝本で文化八年（一八一）に書写された。この両書にのみ松源



院に関する記載がなく、さらに②に挙げたように他書には認められない碧玉庵や看松庵の内容を記す。

一方、芳春院の伝本であるb『宝山誌鈔』とc『紫野大徳寺中客殿画之知簿』も近い内容を有する。龍光院の記述には混乱がみられるものの、玉林院の「衣鉢の間」について後者が「周雪」と記す以外、記述の有無も含めてほぼ同内容となっている。bの書写年代は享保五年（一七二〇）と最も古いことから、cはこれに基づく同種の伝本を写したとみてよいだろう。

また、寛政十一年（一七九九）に刊行されたe『都林泉名勝図会』は、元文五年（一七四〇）書写のd『竜宝山大徳寺堂舎便覧宝物記』と近い内容を有している。ただし、書き誤りとも思える部分も含め、龍源院、興臨院、玉林院、清泉寺、孤蓬庵に関しては他書と対立する独自の説を記載する。龍源院の襖絵主要部分を長谷川等伯、興臨院の「檀那の間」における「彩色韃靼人狩之図」を土佐光信、玉林院の「大書院」における「薄彩色松梅鶴之図」を狩野探幽、清泉寺の各室を長谷川等伯と記すのに対し、他書はそれぞれ雪舟門人の等周、狩野元信、狩野探雪、雲谷等益と一致をみる。

特に寛政五年（一七九三）に焼失した孤蓬庵の客殿については、他書が狩野探幽とするのに対し、探幽弟・尚信の孫に相当する木挽町狩野三代の狩野周信と記す。「礼の間」「檀那の間」に関しては画題も異なり、「松竹梅」としている。これは焼失後の再建時に設置

された襖絵に対する記述とみられるが、文化八年（一八一）書写のaは狩野安信の息である中橋狩野家二代・狩野時信として異説を掲げる。孤蓬庵の焼失後には寛政九年（一七九七）に雲林院の客殿が移築されたため、この筆者の異同については雲林院本来の襖を考慮する必要がある。ただ、他書は探幽の息子で鍛冶橋狩野二代・狩野探信の一筆、探信とその弟・探雪の二筆、探幽と探雪の二筆とまぢまちであり、その説は一定をみない。

なお、焼失後に再建された書院「直入軒」の「滝山水図」には「探幽法印行年七十歳画之」との落款があり、寛文十一年（一六七）に狩野探幽が描いたとわかるものの、これも他所から移設されたと推察されている。この書院については、ひとりe『都林泉名勝図会』のみが狩野探幽の筆と明記している。

f『竜宝山大徳寺堂舎宝物記』は収録する塔頭数が他書よりも少ないものの、記述において独自性が認められる。まず、前章で触れたように、如意庵における「中の間」と「檀那の間」を狩野元信の筆とするものの、そこに狩野探幽による「書足シ」、つまり後補の存在を記している。また、大用庵における「中の間」について、他書に認められない「東襖」を挙げ、「芦鶴蓮水鳥」との画題かつ足利將軍家に同朋衆として仕えた相阿弥（？）（一五二五）の筆であったことを記す。一方、大慈院については他書が長谷川等伯もしくは雲谷等益の一筆とするなか、「中の間」と「礼の間」は雲谷等与、「檀

那の間」「衣鉢の間」「西の間」は雲谷等益、「大書院」は狩野永徳の門人で京狩野家の祖とされる狩野山楽（一五五九～一六三五）と、複数の手になることを伝える。

これに加え、他書が触れない左京区修学院に所在した金龍院の末寺・守禅庵を挙げる。客殿一式を狩野探幽の門人で、尾形光琳の師としても知られる山本素軒（？～一七〇六？）が手掛けたとする。同寺については、天明七年（一七八七）刊行の『拾遺都名所図会』が「赤山社二町計北の山腹にあり。禅宗、開基は徹翁義亨和尚也、大燈国師乃廟所有、初めは一乗寺村圓光寺の後山にあり」と触れている。

以上の諸資料は親子や兄弟の関係のように単純な系統にあるのではなく、記述内容の近似性から、本資料とa、bとc、dとeのグループに分けることが可能となる。その系統をより明瞭にし、全体としての資料的価値を高めるためにも、大徳寺塔頭の襖絵について記した資料がさらに見出され、紹介の機会が設けられることに期待したい。

【註】

- (1) 拙稿「小泉檀山の基礎資料について―立原翠軒『上京日記』と狩野文庫本『檀山先生門人姓名録』を中心に―」（『美術史学』第四〇号 東北大学大学院文学研究科美術史学講座 二〇一九年）。

(2) 『サントリー美術館二十周年記念論集』（サントリー美術館 一九八二年）。

(3) 土居次義「大徳寺真珠庵に於ける伝元信の襖絵に就いて」（『史迹と美術』第四十二号 一九三四年）、同「大徳寺方丈の探幽画」『片山尚景のこと』「長谷川等伯画攷」（『近世日本絵画の研究』美術出版社 一九七〇年 所収）などにおいて書名を挙げられている。

(4) 東北大学附属図書館のご教示による。

(5) 速水宗達の伝記については、『速水宗達著作選集Ⅱ』（就実女子大学文学部史学科内 神原研究室 一九九一年）、『速水宗達著作選集Ⅲ』（就実女子大学文学部史学科内 神原研究室 一九九三年）、神原邦男『速水宗達の研究』（吉備人出版 一九九八年）を参照した。なお、宗達の没年に関し、『速水宗達の研究』の「第一章 速水宗達と日本茶道史研究」では二説が唱えられているが、「第五章 茶道速水流における門人について」では改めて「この誓詞より、速水宗達が文化六年十一月には生存しており、没年は文化七年十月であることが確定できる」とされる。本稿もこの説に従った。

(6) 速水宗達と裏千家歴代家元との関係は、以下の論考を参照した。筒井絃一「一燈の生涯——裏千家中興の祖——」（千宗室監修『裏千家今日庵歴代 第八巻 又玄斎一燈』淡交社 二〇〇八年）、同「不見斎——利休二百年忌の厳修と千家茶道の興隆——」（千宗室監修『裏千家今日庵歴代 第九巻 不見斎石翁』淡交社 二〇〇八年）、同「認得斎の生涯——認得斎の茶境と交友——」（千宗室監修『裏千家今日庵歴代 第十巻 認得斎柏廬』淡交社 二〇〇八年）。

(7) 未見ではあるが、『国書総目録』には「むらさき野大徳寺名画書付」

(東京藝術大学・脇本楽之軒文庫R721-53) という一書も認められる。

(8) 半井家については、堺市役所編『堺市史 第七卷』(三秀舎 一九三〇年)「第一編 人物誌」、京都医師会医学史編纂室編『京都の医学史』(思文閣出版 一九八〇年)、『堺をめぐる人びと』(堺市博物館 一九八一年)、杉立義一「和氣・半井家(本流分流関連)略系図」(『啓迪』第八号 一九九〇年)を参照した。

(9) 「画題」は『雑記』に基づいたが、他書に具体的な表記がある場合は( )で補った。また、「筆者」は通名で記したが、資料における表記を( )で示した。fを除くすべての資料で「古法眼」と表記される狩野元信については、すべて通名のみで表記し、逐一( )では示さなかった。

(10) 川上貢『新訂』『禅院の建築』(中央公論美術出版 二〇〇五年)を参照した。

(11) 東北大学附属図書館狩野文庫本(所蔵番号・二八九四)を掲示した。法量は縦四五・〇、横五五・五センチメートル。左下に「書肆 京都千本通一條下町 河野伊兵衛製本之記」の朱文印が捺されるのみで、年紀は認められない。ただし、京都府立京都学・歴史館が所蔵する同版の『龍宝山大徳禅寺山内図』(所蔵番号・和二六三―三)には、右上の空白部分に「文政八年酉秋発刊 弘所書林 京寺町通六角下 小川源兵衛 同室町通中立売上 平野屋善兵衛」と版で刷られている。

(12) 『弁玉集』と『画工便覧』は坂崎坦編『日本画論大観』(アルス 一九二九年)、『扶桑名工画譜』は『芸苑叢書』所収本を参照した。なお、『本朝画印伝』は『万宝全書』に含まれる架蔵本を参照した。引用する際に漢文を書き下し、カタカナをひらがなに改めた。

(13) 『増訂古画備考』(思文閣出版 一九八三年再版)。なお、「卷四十

一 狩野門人譜二」には「沼津乗昌 沼津に住す。系図に興甫の子に乘昌とありて脇に沼津とあり、其子松伯と云て引如何、又祖西門人とす。」とあり、狩野興以の長男で紀伊和歌山藩の御用絵師となった興甫(？一六七一)の子であったとも伝える。ただし、これは十八世紀初頭頃の刊行と見られる両面一枚刷「狩氏画工道統并印譜」のうち、「狩野免許門人系」の「興甫(弥右衛門)」に続いて「乗昌 沼津」とあり、少し離れて「松伯」と記されることの誤解とみられる。系譜の実線は師弟関係にも使用され、「松伯」は「乗昌」の余白に記されるのみで、必ずしも直接的な関係を示すものとは解釈できない。

(14) 『本朝古今書画便覧』と『新撰和漢書画一覽』は架蔵本を参照した。引用する際には、漢文を書き下し、カタカナをひらがなに改めた。

(15) 加藤定彦編『初印本毛吹草』(ゆまに書房 一九七八年)。

(16) 野間光辰編『新修京都叢書 第十卷』(臨川書店 一九六八年)所収。

(17) 『続日本随筆大成 別巻 民間風俗年中行事上』(吉川弘文館 一九八三年)所収。

(18) 『扶桑名画伝』(哲学書院 一九九九年)「第四十 雑家」の「瀧野某」に全文が揭示される。本稿は国文学研究資料館が公開する「日本古典籍総合目録データベース」で閲覧可能な大和文華館本に拠った。

(19) 『叢書江戸文庫四二 多田南嶺集』(国書刊行会 一九九七年)所収。

(20) 南明庵については「重要文化財 玉林院南明庵及び茶室修理工事

報告書(京都府教育委員会 一九八〇年)が詳しいが、襖絵の詳細は記されていない。本庵を含む大徳寺諸塔頭の襖絵については、河野元昭「探幽を中心とする大徳寺玉林院障壁画」(『美術研究』第二九八、二九九号 一九七五年)、同「本坊方丈の探幽筆障壁画」(『日本古寺美術全集 第二十三卷 大徳寺』集英社 一九七九年 所収)、同『日本の美術一九四』狩野探幽(至文堂 一九八二年)、山根有三「塔頭の障壁画」(『日本古寺美術全集 第二十三卷 大徳寺』集英社 一九七九年 所収)が詳しい。

(21) 正山について、『新訂寛政重修諸家譜』(統群書類従刊行会 一九六五年)に「元文四年四月十一日はじめて有徳院殿にまみえたまつり、寛保三年四月三日家を継、宝暦十一年十二月十八日法眼に叙し、天明元年十二月十六日法印に進み、六年七月六日奥医となり、寛政元年五月二十六日務と辞し、二年七月二十五日致仕す。時に七十二歳。妻は井上交泰院方正が女」とある。なお、曲直瀬家については、京都医師会医学史編纂室編『京都の医学史』(思文閣出版 一九八〇年)、小曾戸洋「曲直瀬養安院家の人々——麻布天真寺に遺存する資料等から——」(『漢方の臨床』第三十四卷第十二号(通算四〇〇号) 東亜医学協会 一九八七年)を参照した。

(22) 東京文化財研究所がウェブ公開する「ガラス乾板データベース」に拠った。「19633・三先生像(曲直瀬字三世像) 東井先生像」とのタイトルで、「19632・三先生像(曲直瀬字三世像) 一溪先生像」「19634・三先生像(曲直瀬字三世像) 玄淵先生像」と一連の作品であることが示される。一九三八年撮影時の所蔵者はレントゲン学の第一人者で、古医学の研究者でもあった藤浪剛一(一八八〇〜一九四二)と記される。

(23) 『新訂寛政重修諸家譜』(統群書類従刊行会 一九六五年)には、正琳の娘(女子)に「沼津氏が妻」、玄理に「沼津氏が男」と記されるのみであるが、小曾戸洋・花輪寿彦・町泉寿郎「曲直瀬養安院文書の研究(一)——家系と肖像」、小曾戸洋・友部和弘・町泉寿郎「曲直瀬養安院文書の研究(二)——文書の概要(上)」、同「曲直瀬養安院文書の研究(三)——文書の概要(下)」、(『日本医史学雑誌』第五十一巻第二号 日本医史学会 二〇〇五年)、小曾戸洋・町泉寿郎「曲直瀬養安院文書の研究(四)——補遺」(『日本医史学雑誌』第五十二巻第二号 日本医史学会 二〇〇六年)という一連の研究では、「沼津乗賢」とされている。同研究は末裔の曲直瀬暢夫氏に伝来した資料に関する調査報告であるが、おそらく列挙される「系譜」や「先祖書」のなかにそれを明記するものがあると推察される。

(24) それぞれの塔頭の変遷については、川上貢「大徳寺の歴史」(『日本古寺美術全集 第二十三卷 大徳寺』集英社 一九七九年 所収)、同『新訂』禅院の建築(中央公論美術出版 二〇〇五年)、竹貫元勝『紫野大徳寺の歴史と文化』(淡交社 二〇一〇年)を参照した。

(25) 鹿苑寺の住持であった風林承章の日記『隔冥記』(鹿苑寺 一九六〇年) 承応四年(一六五五) 三月八日条に「狩野右京・同息源四郎・宗貞三人同道、被相尋。則予相對、温麴・吸物、浮盃、點濃茗也。子息源四郎者初相逢也。」と記される。右京は安信、源四郎は時信のことである。これにより、早期の京都滞在時期を知ることができると推察される。

(26) 大源庵については、小山正文「大徳寺塔頭大源庵の絵図」(『史迹と美術』第八八九号 二〇一八年)が詳しい。

(27) 架蔵本および平野宗浄校訂『増補龍宝山大徳禪寺世譜』(復刻版・思文閣出版 一九七九年)を参照した。

(28) 土居次義「大徳寺真珠庵に於ける伝元信の襖絵に就いて」(『史迹と美術』第四十二号 一九三四年)、榊原悟「真珠庵通儒院襖絵、西湖図」をめぐる問題」(『サントリー美術館二十周年記念論集』サントリー美術館 一九八二年 所収)。

(29) 武田恒夫『近世初期障屏画の研究』(吉川弘文館 一九八三年)「第二章障壁画 第二節初期狩野派障壁画」、斉藤昌利「旧養徳院襖絵について」(『東海大学教養学部紀要』第十四号 一九八三年)、山本英男「旧養徳院襖絵における改変の状況について」(『学叢』第十一号 京都国立博物館 一九八九年)、金沢弘『日本の美術 三三四 水墨画』如拙・周文・宗湛(至文堂 一九九四年)。  
(30) 源豊宗考註『等伯画説』(和光出版 一九六三年)。

#### 【図版出典】

- 図1・2・A 筆者撮影
- 図3 千宗室監修『裏千家今日庵歴代 第八卷 又玄斎一燈』(淡交社 二〇〇八年)
- 図5 『叢書江戸文庫四二 多田南嶺集』(国書刊行会 一九九七年)
- 図6 『重要文化財 玉林院南明庵及び茶室修理工事報告書』(京都府教育委員会 一九八〇年)
- 図7 藤浪剛一『医家先哲肖像集』(図書刊行会 一九七七年)

#### 【附記】

本稿をなすにあたり、大阪芸術大学の五十嵐公一氏から大徳寺の襖絵に関する種々のご教示を賜った。末筆ながらここに記して謝意を表します。

b「宝山誌鈔」	c「紫野大徳寺中客殿画之知簿」	d「竜宝山大徳寺堂舎便覧宝物記」	e「都林泉名勝図会」	f「大徳寺堂舎宝物記」
—	大田南畝 編	日寛宗舜（大徳寺 352 世）写	秋里籬島 著	—
真珠庵 （芳春院伝本）	〔三十幅 第二卷〕 （大東出版社 1939 年）所収	静嘉堂文庫	—	静嘉堂文庫
享保 5 年（1720）写	享和 3 年（1803）序	元文 5 年（1740）写	寛政 11 年（1799）刊	—
筆 者				
長谷川等伯	—	—	長谷川等伯	—
狩野元信	—	—	—	—
狩野元信	—	—	—	—
海北友松	—	—	—	—
狩野探幽	—	狩野探幽	狩野探幽	—
—	—	（一式）狩野探幽	（一式）狩野探幽	狩野探幽
—	—	—	—	—
狩野探幽	狩野探幽	狩野探幽	狩野探幽	狩野探幽（法眼守信）
狩野元信	狩野元信	狩野元信	狩野元信	狩野元信 北之方書足シ・狩野探幽 （礼の間）狩野元信 南之方書足シ・狩野探幽
—	—	狩野元信	狩野元信	狩野元信
—	—	—	—	相阿弥
—	—	小栗宗湛（宗旦）	小栗宗湛（宗丹）	周文
—	—	—	—	相阿弥
狩野元信	狩野元信	狩野元信	狩野元信	—
小栗宗湛（宗丹）	小栗宗湛（宗丹）	周文	周文	—
—	—	—	—	—
—	—	相阿弥	相阿弥	—
曾我蛇足	曾我蛇足	曾我蛇足	曾我蛇足	曾我蛇足（宗文）
長谷川等伯	長谷川等伯	長谷川等伯	長谷川等伯	長谷川等伯
曾我蛇足	曾我蛇足	曾我蛇足	曾我蛇足	—
小栗宗湛（宗丹）	小栗宗湛（宗丹）	小栗宗湛（宗旦）	小栗宗湛（宗丹）	小栗宗湛（宗旦）
李周文	李周文	李周文	周文	周文
小栗宗湛（宗丹）	小栗宗湛（宗丹）	小栗宗湛（宗旦）	小栗宗湛（宗丹）	小栗宗湛（宗旦）
等周	等周（雪舟内弟、洞春歟）	雪舟内弟 等周	長谷川等伯	長谷川等周（等舟）
—	—	—	—	小栗宗湛（宗旦）
—	—	—	—	—
相阿弥	相阿弥	相阿弥	相阿弥	相阿弥
狩野之信（雅楽助）	狩野之信（雅楽）	狩野之信（雅楽助）	狩野之信（雅楽助）	狩野之信（雅楽助）
狩野元信	狩野元信	狩野元信	狩野元信	狩野元信
狩野元信	狩野元信	狩野元信	狩野元信	狩野元信
—	—	—	土佐光信	—
—	—	—	—	—
狩野元信	狩野元信	狩野元信	狩野元信	狩野元信
狩野松栄（松永）	狩野松栄	狩野松栄（松永）	狩野松栄	狩野松栄（戸部直信）
土佐光信	土佐光信	土佐光信	土佐光信	土佐光信
狩野永徳	狩野永徳	狩野永徳	狩野永徳	狩野永徳
—	—	—	—	—
長谷川等伯	長谷川等伯	長谷川等伯	長谷川等伯	長谷川等伯
—	—	—	—	—
—	—	—	—	—

【表1】大徳寺塔頭筆者・異同一覧表(1)

		資 料		『竜宝山大徳寺 境内并諸塔頭雑記』	a『紫野大徳寺明細記』			
		書 写 者		速水宗達 写	半井宗珠 写			
		所 蔵		東北大学附属図書館 (玉林院伝本)	真珠庵 (寸松庵伝本)			
		書 写 (刊 行) 年		天明5年(1785)写 【原本】安永6年(1777)写	文化8年(1811)写			
寺 院	堂 舎	場 所	画 題	現 状	筆 者			
大徳寺	山門	天井絵	(龍・天人)	現 存	長谷川等伯	長谷川等伯		
		天井画	(天人)	現 存(状態悪し)	狩野元信	狩野元信		
	仏殿	後門	羅漢	確認できず	狩野元信	狩野元信		
		仏後	龍	現 存(状態悪し)	海北友松	海北友松		
	法堂	天井画	龍	現 存	狩野探幽	狩野探幽		
			中の間	墨絵山水	現 存	狩野探幽	(一式) 狩野探幽	
		礼の間	墨絵山水					
		勅使の間	墨絵山水					
		方丈	衣鉢の間 (衣鉢閣・裏東間)	墨絵猿引	昭和41年(1966)焼失			
			勘定の間(裏西間)	墨絵竹雉	現 存			
雲門庵前	墨絵山水							
徳禪寺	客殿	一式	墨絵雲龍梅竹虎	現 存	狩野探幽	狩野探幽		
如意庵	客殿	中の間	墨絵山水	明治11年(1878) 徳禪寺に合併廃絶	狩野元信	狩野元信 北4枚・狩野探幽		
		檀那の間	墨絵西湖ノ図	昭和48年(1973)再興 →真珠庵通徳院に移設	狩野元信 南2枚・狩野探幽補	狩野元信 南4枚・狩野探幽		
大用庵	客殿	中の間	墨絵花鳥柳鶴	明治11年(1878) 徳禪寺に合併廃絶	小栗宗湛(宗旦) / 狩野元信	狩野元信		
		中の間・東棟	(芦鶴連水鳥)		—	—		
		礼の間	墨絵山水		周文(朱文)	周文		
		大書院	墨絵柳鳥		狩野元信	狩野元信		
松源院	客殿	中の間	(墨絵花鳥)	明治11年(1878) 徳禪寺に合併廃絶	—	—		
		礼の間	(墨絵山水)		—	—		
	旧客殿	中の間	—		—	—		
真珠庵	客殿	中の間	墨絵花鳥	現 存	曾我蛇足	曾我蛇足		
		礼の間	墨絵山水		長谷川等伯	長谷川等伯		
		檀那の間	墨絵四皓		曾我蛇足	曾我蛇足		
		衣鉢の間(衣鉢閣)	蜆子猪頭					
養徳院	客殿	大書院	墨絵艸之山水					
		中の間	墨絵芦雁	流 出(京都国立博物館) →小栗宗湛筆	周文 西4枚・小栗宗湛補	周文		
		礼の間	墨絵山水		周文			
		檀那の間	薄彩色琴棋書画		小栗宗湛(宗丹)	小栗宗湛(宗旦)		
衣鉢の間(衣鉢閣)	墨絵山水							
龍源院	客殿	中の間	墨絵列仙	散 逸	長谷川等周	長谷川等周		
		礼の間	薄彩色山水					
		檀那の間	墨絵猿猴					
		礼の間・東方	墨絵山水				—	4枚・小栗宗栗補
大仙院	客殿	檀那の間・西方	墨絵柳鶯芦翡翠	—	4枚・小栗宗湛(宗旦)補	4枚・小栗宗栗		
		中の間	墨絵山水(瀟湘八景)	現 存	相阿弥	相阿弥		
		礼の間	薄彩色耕作		狩野之信(雅楽助)	狩野之信(雅楽之助)		
		檀那の間	彩色花鳥水入之鳴		狩野元信	狩野元信		
		衣鉢の間(衣鉢閣)	墨絵祖師之図		—	—		
		大書院	朱買臣太公望		流 出(東京国立博物館)	—	—	
興臨院	客殿	中の間	墨絵山水花鳥		散 逸	狩野元信	狩野元信	
		礼の間	彩色花鳥麝香					
		檀那の間	彩色韃靼人狩之図	—				—
		衣鉢の間(衣鉢閣)	(彩色韃靼人狩之図)	—				—
瑞峯院	客殿	中の間	墨絵七賢四皓巢父許由	散 逸	狩野元信	狩野元信		
		礼の間	彩色花鳥		狩野松栄	狩野松栄		
		檀那の間	薄彩色堅田ノ図		土佐光信	土佐光信		
聚光院	客殿	中の間	墨絵松竹梅軒花鳥	現 存	狩野永徳	狩野永徳		
		礼の間	墨絵山水	現 存 → 狩野松栄筆				
		檀那の間	墨絵琴棋書画	現 存				
		衣鉢の間(衣鉢閣)	虎豹猿	現 存 → 狩野松栄筆				
総見院	客殿	中の間	墨絵山水	明治11年(1878) 大徳寺に合併廃絶 のち再興	長谷川等伯	長谷川等伯		
		礼の間	墨絵山水猿猴鶴					
		檀那の間	墨絵芦雁					
		衣鉢の間(衣鉢閣)	墨絵山水					
		大書院	墨絵山水松					

速水宗達写『竜宝山大徳寺境内并諸塔頭雑記』——大徳寺塔頭に関する絵画の筆者と諸情報——

b「宝山誌鈔」	c「紫野大徳寺中客殿画之知簿」	d「竜宝山大徳寺堂舎便覧宝物記」	e「都林泉名勝図会」	f「大徳寺堂舎宝物記」
—	大田南畝 編	日寛宗舜（大徳寺 352 世）写	秋里籬島 著	—
真珠庵 （芳春院伝本）	〔三十幅 第二卷〕 （大東出版社 1939 年）所収	静嘉堂文庫	—	静嘉堂文庫
享保 5 年（1720）写	享和 3 年（1803）序	元文 5 年（1740）写	寛政 11 年（1799）刊	—
筆 者				
雲谷等顔	雲谷等顔	雲谷等顔	雲谷等顔	雲谷等顔（長谷川）
狩野永徳	狩野永徳	狩野永徳	狩野永徳	狩野永徳 — 狩野永徳
長谷川等伯	長谷川等伯	長谷川等伯 — — — 長谷川等伯	長谷川等伯 — — — 長谷川等伯	長谷川等伯 — — — 長谷川等伯
狩野興以	狩野興以	狩野興以	狩野興以	狩野興以
狩野寿石	狩野寿石	狩野寿石	狩野寿石	狩野寿石
片山尚景（狩野）	片山尚景（狩野）	片山尚景（狩野）	片山尚景（狩野）	片山尚景（狩野）
—	—	—	—	—
（一式）雲谷等益	（一式）雲谷等益	（一式）雲谷等益（狩野）	（一式）長谷川等伯	雲谷等与（長谷川） 雲谷等益（長谷川） 狩野山楽 雲谷等益（長谷川）
長谷川等伯	長谷川等伯	長谷川等伯	長谷川等伯	長谷川等伯
狩野探幽	狩野探幽	狩野探幽	狩野探幽	狩野探幽
狩野常信（養卜）	狩野常信（養卜）	狩野常信（養朴）	狩野常信（養朴）	狩野常信
狩野安信（永真）	狩野安信（永真）	狩野安信（永真）	狩野安信（永真）	狩野安信
狩野益信（洞雲）	周雪	狩野益信（洞雲）	狩野益信（洞雲）	狩野益信（洞雲）
狩野探雪	狩野探雪	狩野探雪	狩野探幽	狩野探雪
狩野洞春	狩野洞春	狩野洞春	狩野洞春	狩野洞春
筆者不知	不知筆者	筆者不知	不知筆者	—
—	—	—	—	—
狩野益信（洞雲）	狩野益信（洞雲）	狩野安信（永真）	狩野安信（永真）	狩野安信
長谷川等伯	長谷川等伯	長谷川等伯 — 長谷川等伯	長谷川等伯 — 長谷川等伯	長谷川等伯 （彩色真山水）長谷川等悦 長谷川等伯 — —
狩野安信	狩野安信	狩野安信	狩野安信	狩野安信
—	—	—	—	—
雲谷等顔 長谷川等伯	長谷川等伯	雲谷等顔 長谷川等伯	雲谷等顔 長谷川等伯	長谷川等伯
雲谷等顔	雲谷等顔 長谷川等伯 雲谷等顔	雲谷等顔 — —	雲谷等顔 — —	長谷川等伯 — —
—	—	—	—	—



【表1】大徳寺塔頭筆者・異同一覧表(2)

		資 料		『竜宝山大徳寺 境内并諸塔頭雜記』	a『紫野大徳寺明細記』
		書 写 者		速水宗達 写	半井宗珠 写
		所 蔵		東北大学附属図書館 (玉林院伝本)	真珠庵 (寸松庵伝本)
		書 写 (刊 行) 年		天明5年(1785)写 【原本】安永6年(1777)写	文化8年(1811)写
寺 院	堂 舎	場 所	画 題	現 状	筆 者
黄 梅 院	客 殿	中の間	墨絵七賢人	現 存	雲谷等顔 (長谷川)
		礼の間	墨絵芦嶋		
		檀那の間	西湖之図		
金鳳山天瑞寺	客 殿	中の間	金地彩色松一色	明治7年(1874)年破却 同11年大徳寺に合併廃絶	狩野永徳
		礼の間	金地彩色竹一色		
		檀那の間	金地彩色桜一色		
		衣鉢の間 (衣鉢閣・御成の間)	金地彩色菊一色		
		大書院	墨絵山水		
		東の間(表東の間)	墨絵三笑之図		
		東北の間(裏の間)	墨絵富士之図		
三 玄 院	客 殿	中の間	墨絵山水	流 出 (32面・円徳院 4面・楽美術館)	長谷川等伯
		礼の間	墨絵山水		
		檀那の間	墨絵山水		
		衣鉢の間(衣鉢閣)	墨絵山水		
		大書院	墨絵山水		
		西の間(勅使の間)	墨絵人形(伯夷叔齊巢父 許由漁父屈原)閻次平写		
正 受 院	客 殿	中の間	墨絵列仙	明治維新時に焼失	狩野興以
		礼の間	墨絵山水		狩野寿石
		檀那の間	墨絵山水		片山尚景(狩野)
		書院	墨絵山水		土佐光成/土佐光高
大 慈 院	客 殿	中の間	墨絵十分盃図	文政13年(1830) 地震により半倒壊・散逸	(一式)長谷川等伯
		礼の間	墨絵西湖之図		
		檀那の間	墨絵山水		
		衣鉢の間(衣鉢閣)	墨絵八景		
		大書院	彩色蠶婦図		
		西の間	墨絵竹		
高 桐 院	客 殿	中の間	(墨絵桜木)	散 逸	—
		礼の間	(墨絵柳驢馬)		
		檀那の間	(墨絵蠶婦之図)		
		衣鉢の間(衣鉢閣)	(墨絵千鳥)		
		大書院	(墨絵山水)		
玉 林 院	客 殿	中の間	墨絵山水	現 存	狩野探幽
		礼の間	薄彩色山水		狩野常信
		檀那の間	薄彩色七賢人四愛堂之図		狩野安信
		衣鉢の間(衣鉢閣)	墨絵琴棋書画		狩野益信(洞雲)
		大書院	薄彩色松梅鶴之図		狩野探雪
		西の間	墨絵山水		狩野洞春
		杉戸・東	松に猿蓑竹双鶴		現 存
杉戸・西	麝香	現 存	狩野栄川典信		
大 光 院	客 殿	中の間	墨絵七賢四皓	文化13年(1816) 焼失のち再興	狩野安信
		礼の間	墨絵夏之図荷葉芦雁		
		檀那の間	墨絵秋之図山水人形		
		衣鉢の間(衣鉢閣)	墨絵冬之図山水		
		大書院	薄彩色竹鶴		
金 竜 院	客 殿	中の間	墨絵山水	明治11年(1878) 龍源院に合併廃絶	長谷川等伯
		礼の間	墨絵四愛堂		
		檀那の間	墨絵大松		
		衣鉢の間(衣鉢閣)	墨絵山水		
		書院	墨絵大菊		
		杉戸・東	彩色芦鷺		
		杉戸・西	紅葉鳥		
昌 林 院	客 殿	中の間	墨絵七賢人	天保年中(1830~44)倒壊 明治11年(1878) 黄梅院に合併廃絶	狩野安信
		礼の間	墨絵山水		狩野安信
		檀那の間	墨絵山水		狩野時信
		衣鉢の間(衣鉢閣)	墨絵花鳥		—
龍 光 院	客 殿	中の間	墨絵唐松列仙	明治維新時に撤去・散逸	長谷川等伯
		礼の間	墨絵唐松列仙		雲谷等顔(長谷川)
		檀那の間	墨絵真山水		長谷川等伯
		衣鉢の間(衣鉢閣)	墨絵金山寺之図		—
		大書院	墨絵岬之山水		—
		杉戸・一間半二枚	(唐獅子四疋)		—
書院	—	現 存	—		
			(墨絵山水)		狩野探幽

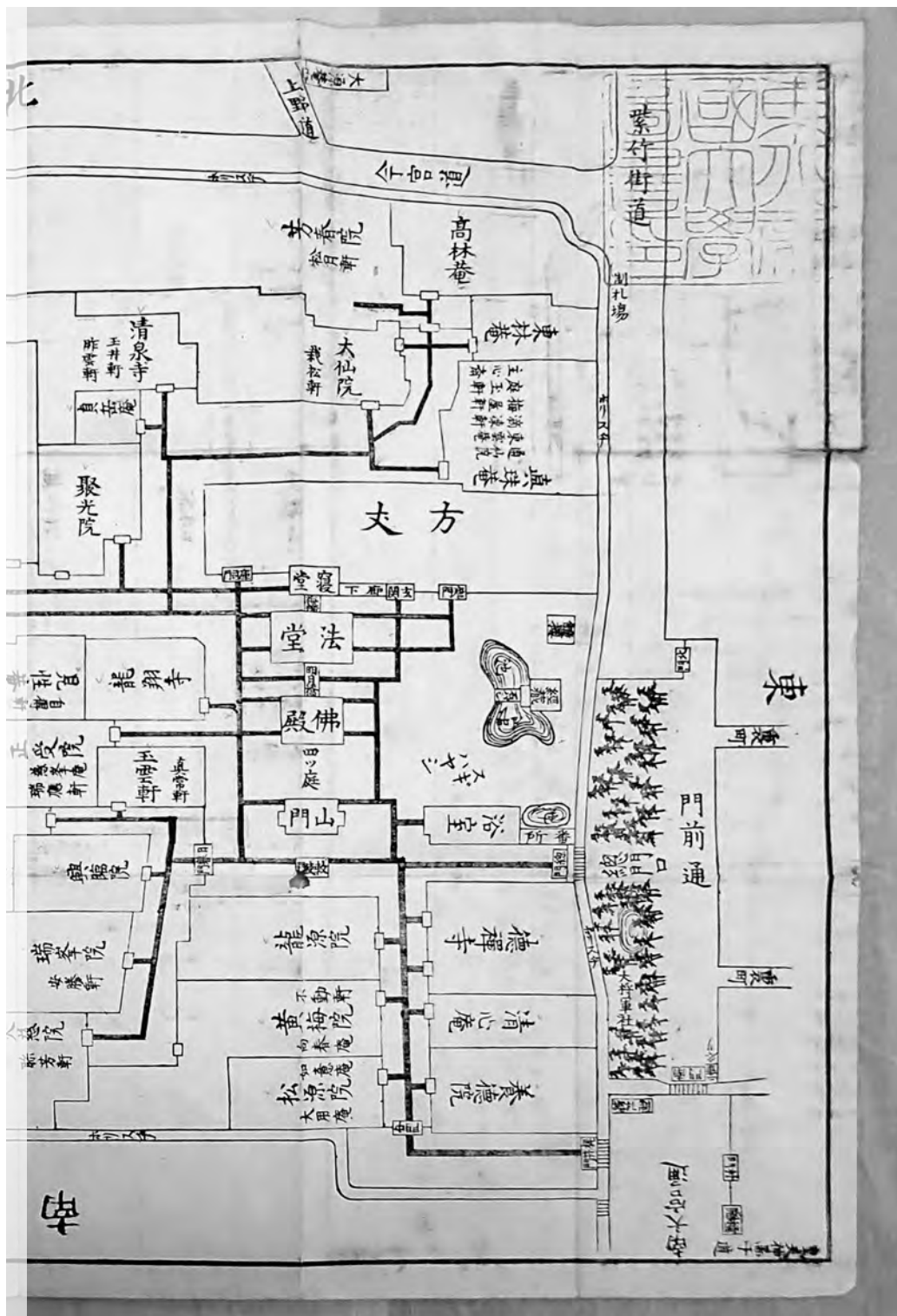
速水宗達写『竜宝山大徳寺境内并諸塔頭雜記』——大徳寺塔頭に関する絵画の筆者と諸情報——

b 「宝山誌鈔」	c 「紫野大徳寺中客殿画之知簿」	d 「竜宝山大徳寺堂舎便覧宝物記」	e 「都林泉名勝因会」	f 「大徳寺堂舎宝物記」
—	大田南畝 編	日寛宗舜 (大徳寺 352 世) 写	秋里籬島 著	—
真珠庵 (芳春院伝本)	〔三十幅 第二卷〕 (大東出版社 1939 年) 所収	静嘉堂文庫	—	静嘉堂文庫
享保 5 年 (1720) 写	享和 3 年 (1803) 序	元文 5 年 (1740) 写	寛政 11 年 (1799) 刊	—
筆 者				
狩野探幽	狩野探幽	狩野探幽	狩野探幽	狩野探幽
—	—	—	—	—
狩野興以	狩野興以	狩野興以	狩野興以 (興意)	—
—	—	—	—	—
雲谷等益	雲谷等益	雲谷等益	長谷川等伯	—
片山隆也 (狩野)	片山隆也 (狩野隆世)	片山隆也 (狩野)	狩野興也	—
別所如閑	別所如閑 (恕閑)	別所如閑 (如閑)	別所如閑	—
—	—	—	—	—
狩野探幽	狩野探幽	狩野探幽	狩野探幽	—
—	—	—	—	—
—	—	—	—	—
狩野探幽	狩野探幽	—	(山 水) 狩野周信 (松竹梅) 狩野周信 (松竹梅) 狩野周信 —	—
—	—	—	狩野探幽	—
—	—	—	—	—
雲谷等益	雲谷等益	雲谷等益	雲谷等益	—
—	—	—	—	—
狩野探幽	狩野探幽	狩野探幽	狩野探幽	—
狩野安信	狩野安信	狩野安信	狩野安信	—
狩野探幽	狩野探幽	狩野探幽	狩野探幽	—
狩野益信	狩野益信	狩野益信	狩野益信	—
狩野常信	狩野常信	狩野常信	狩野常信	—
—	—	—	—	—
狩野永納	狩野永納	狩野永納	狩野永納	—
—	—	—	—	—
雲谷等益	雲谷等益	雲谷等益	雲谷等益	—
—	—	—	—	—
—	—	狩野探信 / 狩野探雪	狩野探幽 / 狩野探雪	狩野探信 / 狩野探雪
小栗宗栗 (宗律)	小栗宗栗 (宗律)	小栗宗栗	—	小栗宗栗
小栗宗湛 (宗丹)	小栗宗湛 (宗丹)	小栗宗湛 (宗旦)	小栗宗湛 (宗丹)	小栗宗湛 (宗旦)
—	—	—	—	山本素軒 (祖賢)

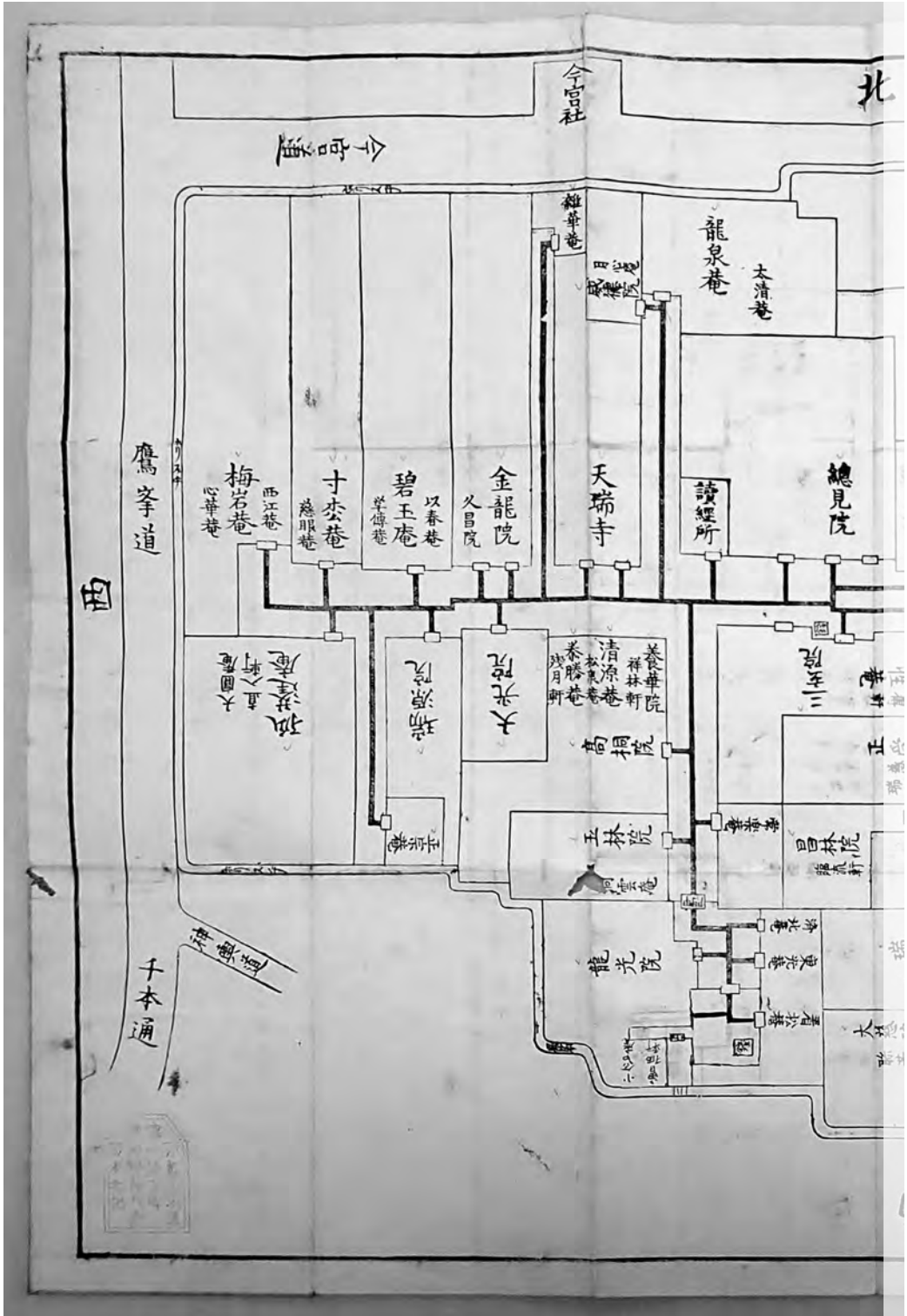
【表1】大徳寺塔頭筆者・異同一覧表(3)

		資 料		『竜宝山大徳寺 境内并諸塔頭雜記』	a『紫野大徳寺明細記』	
		書 写 者		速水宗達 写	半井宗珠 写	
		所 蔵		東北大学附属図書館 (玉林院伝本)	真珠庵 (寸松庵伝本)	
		書 写 (刊 行) 年		天明5年(1785)写 【原本】安永6年(1777)写	文化8年(1811)写	
寺 院	堂 舎	場 所	画 題	現 状	筆 者	
芳 春 院	客 殿	中の間	薄彩色祖師之図	寛政8年(1796) 焼失のち再興	狩野探幽	狩野探幽
		礼の間	墨絵獅子牡丹			
		檀那の間	薄彩色人形四愛堂			
		衣鉢の間(衣鉢閣)	墨絵山水			
		大書院	薄彩色花鳥			
白小書院	墨絵山水					
龍 泉 庵	客 殿	中の間	墨絵西湖之図	明治維新後に廃絶 昭和34年(1959)再興	狩野興以	(一式) 狩野興以
		礼の間	墨絵人形			
		檀那の間	墨絵梅			
		衣鉢の間(衣鉢閣)	墨絵耕作			
		大書院	墨絵柳牛			
		杉戸・一間	彩色竹に鶴			
		杉戸・一間	岩に野雉			
杉戸・一間二枚折	彩色牡丹花下睡猫児片面					
清 泉 寺	客 殿	中の間	薄彩色山水	明治11年(1878) 三玄院に合併廃絶	雲谷等益(長谷川)	(一式) 雲谷等益
		礼の間	薄彩色四愛堂			
		檀那の間	薄彩色琴棋書画			
		衣鉢の間(衣鉢閣)	薄彩色山水			
		大書院	薄彩色山水			
梅 岩 庵	客 殿	中の間	墨絵松竹梅	廃 絶	片山隆也(狩野)	片山隆也(狩野)
		礼の間	墨絵花鳥			
		檀那の間	墨絵八景			
		衣鉢の間(衣鉢閣)	墨絵人形			
		大書院	墨絵人形			
寸 松 庵	客 殿	中の間	墨絵曲水之図	天保5年(1834)焼失 明治11年(1878) 龍光院に合併廃絶	狩野探幽	(一式) 狩野探幽
		礼の間	墨絵雪中山水			
		檀那の間	墨絵花鳥			
		衣鉢の間(衣鉢閣)	(西湖八景)			
		小書院	墨絵人物			
孤 蓬 庵	客 殿	中の間	墨絵山水	寛政5年(1793) 焼失のち再興	狩野探幽	(一式) 狩野時信 (炎上前・狩野探幽一筆也)
		礼の間	墨絵獅子			
		檀那の間	墨絵捨雪			
		衣鉢の間(衣鉢閣)	墨絵柳竹雀			
		書院	(山水)			
碧 玉 庵	客 殿	中の間	中彩色(涓陽狩図)	廃 絶	雲谷等顔(長谷川)	雲谷等顔
		礼の間	中彩色			
		檀那の間	中彩色			
		衣鉢の間(衣鉢閣)	中彩色			
		大書院	中彩色			
瑞 源 庵	客 殿	中の間	墨絵人物	廃 絶	(一式) 雲谷等益(長谷川)	(一式) 雲谷等益
		礼の間	山水			
		檀那の間	耕作			
		杉戸	—			
高 林 庵	客 殿	中の間	墨絵山水	明治11年(1878) 芳春院に合併廃絶	狩野探幽	狩野探幽(守信)
		礼の間	墨絵山水			
		檀那の間	墨絵山水			
		衣鉢の間(衣鉢閣)	墨絵山水			
		大書院	墨絵山水			
看 松 庵	客 殿	一式	—	明治11年(1878) 龍光院に合併廃絶	狩野尚信(主馬)	狩野尚信
常 楽 庵	客 殿	一式	墨絵松竹梅	廃 絶	狩野永納	—
見 性 庵	客 殿	中の間	墨絵七賢人	文化13年(1816) 焼失のち廃絶	雲谷等益(長谷川)	(一式) 雲谷等益
		礼の間	墨絵林和靖			
		檀那の間	墨絵真山水			
		衣鉢の間(衣鉢閣)	墨絵山水			
大 源 庵	客 殿	一式	—	明治11年(1878) 三玄院に合併廃絶	雲谷等顔(長谷川)	—
雲 林 院	客 殿	一式	彩色 (総金并砂子彩色花鳥)	寛政9年(1797) 孤蓬庵に移築	狩野探信	—
龍 翔 寺	客 殿	中の間	墨絵花鳥	文化13年(1816)焼失 明治11年(1878) 養徳院に合併廃絶	小栗宗湛(宗丹)	小栗宗湛(宗丹)
		礼の間	中彩色花鳥			
守 禪 庵 (金竜院末寺)	客 殿	中の間	(墨絵花鳥)	廃 絶	—	—
		礼の間	(墨絵山水)			
		礼の間・北の方襖裏	(彩色草花)			
		檀那の間	(墨絵山水)			
		檀那の間・北の方襖裏	(墨絵梅孔雀)			

速水宗達写『竜宝山大徳寺境内并諸塔頭雜記』——大徳寺塔頭に関する絵画の筆者と諸情報——



速水宗達写『竜宝山大徳寺境内并諸塔頭雜記』——大徳寺塔頭に關する絵画の筆者と諸情報——



図A 文政8年(1825)刊『龍宝山大徳寺山内図』東北大学附属図書館・狩野文庫(2894)

【資料翻刻】

速水宗達写『龍宝山大徳寺境内并諸塔頭雜記』

東北大学附属図書館 博士速水宗達稿本並速水家雜纂 四七

(凡例)

- ・判読不明の文字は□で表記した。
- ・各建築物や塔頭名は太字であらわした。
- ・諸塔頭の各間における底本の表記は二室を縦並びに配すが、本資料の使用目的を考慮し、一室ずつ横に並べて掲示した。
- ・細字による注釈は省略した。

天明五巳八月下旬 速水蔵

龍宝山大徳寺境内

并諸塔頭雜記 全

「(二才・表紙)

(一ウ白紙)

大徳寺境内

大宮郷 門前 雲林院村 紫竹村 新門前  
 七野村 大門村

東 清蔵口賀茂道通限 西 千本通丹波道限

南 東ニテハ妙覚寺境内限 中ニテハ天神ノ凶子所ハヅレ限 又安居院町ハヅレ限

北 東ニテハ頭無シノ土居限 中ニテハ大宮ノ森細道限 西ニテハ御土居限

同方境 東 南北二百六拾六間 西 南北百六十七間

南 東西三百九拾一間 北 東西四百十三間

右之坪都計

御池通大宮之辻ヨリ大門入口迄 間数 千八百十二間

町数 三十丁十二間

大門ノ勅使門迄 七間四尺 勅使門ノ山門迄 七間 「(二才)

山門ノ仏殿迄 十四間半 仏殿ノ法堂迄 十一間一尺 法堂ノ方丈迄 五間半

龍宝山 大徳寺

開山特賜興禪大燈高照正燈大慈雲匡真弘鑑常明国師

宗峰妙超大和尚

嗣法於前建長圓通大応国師南浦紹明大和尚

開法嘉暦元丙寅年仏成道日 勅使中納言某于時国師

年四十五歳 示寂 建武四丁丑年十二月廿二日寿五十六歳

檀越 赤松圓心 勅願所之始 正中二年

花園上皇新院賜御祈願所院宣同年

後醍醐天皇賜 勅願所之繪旨於是大徳為兩朝御願道場

寺領 二千拾壹石 御朱印高

「(二ウ)

内諸塔頭千六百六十七石七斗四升六合六勺五才 此内百廿一石四斗八升二合寮舎

但シ竜泉庵 玉雲軒 臨流軒 真常軒 碧玉庵 清泉寺 伝叟軒

以上七ヶ所配当 三百廿石

家康公御改方 但 大光院 金竜 龍光院 芳春院

右之内方丈分見于前竜翔寺分者諸塔頭之内二入之

南門 中門 大門 勅使門 寛永十七年 明正女帝所賜也 勅使進山

之時於此下輿所名

山門 東西十一間南北六間 但シ上二額有 金毛閣 仙岳和尚筆

安於但旧の龍翔寺仏殿ノ三尊也 釈迦文仏迦葉阿難尊者十六羅

漢尊像 門者連哥師宗長再興 閑者千利休宗易 天正十七己寅

年建立 天井絵 長谷川等伯筆七十五歳之年也

仏殿 東西八間 南北七間 祈禱牌 張即子筆 「(三才)

寛文五乙巳年再興 天井画 狩野古法眼筆

後門羅漢 同筆 仏後龍 友松筆

本尊 釈迦文仏

今上皇帝聖躬萬歳 開山国師御筆

大檀那本命元辰吉凶星斗 後醍醐天皇御筆

南方火徳星君火部聖衆 徹翁大和尚筆

土地堂 安於梵天帝釈像韋駄天鼻沙門像及大小神祇伽藍神等□開山国師御筆

祖師堂 安於初祖菩提達磨百丈臨濟 国師筆

法堂 十二間東西 南北九間半 天井画龍 狩野探幽筆

寛永十三丙子筆

稲葉丹後守越智正勝遺命其子美濃守正則再建立

経蔵 四間半四方 安於傳大土普建普成像 那波氏宗旦建立「(三ウ)

鐘樓 東西五間半 益田玄蕃頭元祥及其配大江氏鼎新

南北六間 元和八年 灰屋紹由再興

浴室 東西六間半 額張即子筆

南北五間

唐門 東西三間 明智日向守光秀取所建 呼名明智門と云

南北二間

寢堂 東西三間 寛永七庚午年益田玄蕃頭建立

南北二間半

方丈 東西十五間 方丈額 張即子筆 玄恵法師初建

南北八間半

寛永十三丙子年 平安城居住後藤縫殿允益勝□建立 移古方丈

為庫院

方丈客殿間之画

中之間 墨絵 山水 狩野探幽筆

礼之間 墨画 山水 同筆

勅使ノ間 同 同 同筆

雲門庵前 同 同 同筆

衣鉢間 同 猿引 同筆 名タカシ

勘定間 同 竹鷄 同筆 探幽四季松の屏風さいしき名物と云

雲門庵 開山塔所 額曰靈光初者 花園院法皇宸翰 享徳年中

焼失今所掛額は後土御門天皇宸翰也 文明十八丙午年重賜也

花園法皇御髮塔也 法皇詔貯御髮於小塔中置靈光塔 一(四才)

左辺結当来香火縁也

庫司 東西十二間 南北九間 食堂 安於韋駄天像

東司掛於烏芻惠摩明王并真言陀羅牌

明月橋 架法堂仏殿之間 古此下有小川自西至東架其上

官池 後醍醐天皇曾微行至本山道遙四重瞳指点曰此所

正好開一池因国師穿之称官池

梅橋 古へ梅樹横于官池如架橋因名 五老松 在于官池北五株之

松是也

古巖松 在于法堂仏殿之間二株之松是也

看雲亭 在方丈東南今廢 金剛軒 在僧堂南同

瑞雲亭 在僧堂南金剛軒今廢 達磨峯 比叡山

僧堂 相伝今仏殿西玉雲軒是也 古僧堂と云 応仁年中焼

諸塔頭

靈山徳禪寺 開山 大現国師 徹翁和尚 一(四ウ)

問之画 一式 墨絵 雲龍梅竹虎 狩野探幽筆

如意庵 開山 言外和尚 問之画

中之間 墨絵 山水 狩野古法眼筆

檀那之間 同 西湖ノ図 同筆 南二枚雨氣 探幽カキタス也

大用庵 開山 華叟和尚養叟和尚 問之画

中之間 墨絵 花鳥 柳鶴 小栗宗旦 狩野古法眼筆

礼之間 同 山水 朱文筆

大書院 同 柳鳥 古法眼

松源院 開山 春浦和尚

真珠庵 開山 一休和尚 問之絵

中之間 墨絵 花鳥 曾我蛇足筆

礼之間 同 山水 同筆

大書院 同 艸之山水 同筆

檀那ノ間 同 四皓 長谷川等伯

衣鉢間 同 蜆子猪頭 同筆

養徳院 開山 実伝和尚 問之画

中之間 墨絵 芦雁 李周文筆 西四枚小栗宗旦カキタス也

礼之間 同 山水 同筆 一(五才)



檀那之間 薄彩色琴棋書画 同筆  
衣鉢ノ間 墨絵 山水 小栗宗丹筆

又千宗旦様喝食ヲ□ムト云  
又千宗拙コノ寺ニ寄偶スト云

龍源院

開山 開山 東溪和尚 問之画  
中之間 墨絵 列仙 長谷川等周筆  
礼之間 薄彩色山水 同筆 東四枚 小栗宗栗カキタシ  
檀那之間 墨絵 猿猴 同筆 西四枚 小栗宗旦カキタシ

興臨院

開山 古溪和尚 問之画  
中之間 墨絵 山水花鳥 鳴ヒヨドリ応物也 狩野古法眼  
礼之間 彩色 花鳥麝香 同筆  
旦那間 同 韃靼人狩之図 同筆 「(六才)

大僊院

開山 大聖国師 古岳和尚 問之画  
中之間 墨絵 山水 相阿弥筆  
礼之間 薄彩色耕作 雅楽助筆  
旦那之間 彩色 花鳥水入之鴨 狩野古法眼筆 応需斗也  
衣鉢間 墨絵 祖師之図 同筆  
大書院 同 朱買臣太公望 同筆

瑞峰院

大満国師 徹岫和尚 問之画  
中之間 墨絵 七賢四皓巢父許由 狩野古法眼  
礼之間 彩色 花鳥 狩野松栄  
旦那間 薄彩色堅田ノ図 土佐光信  
聚光院 開山 笑嶺和尚  
三好長慶建立之地 千利休墓所以来千家代々寺也  
但小寺タル故ニスキヤモナシ、ヤウヤク

庭有之相阿弥作之 二十ノ石有之 「(五ウ)

三好長慶建立之地

但小寺タル故ニスキヤモナシ、ヤウヤク

臥牛石 釣舟石 叡山石 靈龜石  
龍頭石 扶老石 仙帽石 伏虎石

(四)

三疊敷中板四尺床ノ大目点ノカコヒ  
天然宗左ノ時ニイトナム、今如此

明鏡石 沈香石 弘子石 法螺石  
布袋石 観音石 不動石 坐禪石  
馬鞍石 仏盥石 独醒石 真珠石  
相阿弥コノ寺ニ寄宿スト云

中ノ間 墨絵 松竹梅艸花鳥 狩野永徳  
礼ノ間 同 山水 同筆

旦那間 同 琴棋書画 同筆  
衣鉢間 虎豹猿 同筆

總見院 開山 古溪和尚 信長公像存有之 間之画

中ノ間 墨絵 山水 長谷川等伯筆 一(六ウ)  
礼之間 墨絵 山水 猿猴鶴 同筆

旦那間 同 芦雁 同筆  
衣鉢ノ間 同 山水 同筆

大書院 同 山水松 同筆

信長公御像ノ前ニ波牡丹之花瓶耄対きぬたの香炉有之

黄梅院 開山 春林和尚 南流 長門□□坊

間之画  
中ノ間 墨絵 七賢人 長谷川等顔  
礼之間 同 芦鴟 同筆

旦那間 西湖之図 同筆

金鳳山天瑞寺 開山 玉仲和尚 北流

間之画 狩野永徳悉ク図ス 秀吉公  
中ノ間 金地彩色松一色

礼之間 同 竹一色

旦那間 同 桜一色  
衣鉢間 同 菊一色

大書院 墨絵 山水  
東ノ間 同 三笑之図

東北ノ間 同 富士之図 又古右京ノ人物ト云ウハイツレン 一(七オ)

三玄院 開山 圓鑑国師春屋和尚

間ノ画 悉長谷川等伯也、但春屋氣質ユル□ニシテ座敷等ニ画ヲ  
図スルコトヲ不好シテ、カラカミニテコレヲハル、和尚留主ノ中ニ等伯コレヲ

描ルトアリ、今ニカラカミ上ニ二画アルコト現然タリ、

中ノ間 墨絵 山水  
礼之間 同 同

旦那間 上二同  
衣鉢ノ間 同 同

西之間 同 人形 閻次平写  
北之間 同 柳燕

大書院 同 山水  
但キリノカラカミの山水ハ等伯ト云ハアヤマリニテ探幽ナリト云セツアリ、アヤシ、

正受院 開山 清庵和尚 間之画

中ノ間 墨絵 列仙 狩野興以筆

礼之間 同 山水 狩野寿石

且那間 同上 狩野尚景

書院 同 山水 土佐光成 光高 兩筆

大慈院 開山 大叔和尚

間之画 一式 墨絵 山水 長谷川等伯筆 一(七ウ)

高桐院 開山 玉甫和尚 北流

細川越中守正興建立ナルベシ、尤三齋翁、石塔ハ大和石ノ

石燈籠也、但利休公おくらるヨシナリ、參府帰国ニ道中迄是

もちて覆もかけズ、宿々の庭ニヲキテ御

尤造主□ナルカ石燈籠ヲ神名塔トス、且聚光院、利休ノ石塔モ

異風ノ石燈籠也、コレハ利休存生ノ内、墓所ヲキツキ石牌ヲタテ、

ソノ両方ニ石ノ石とうろう一ついヲ□□ヨシ也、シカレドモ利休不幸ニシテ

御咎被仰付候ニ付、大徳寺一派ノ僧、打□り、存生□□如此ノ

営ミアルコトヲモ奉聞候テ猶更罪ふかかるべしと打ぐ□して

おけるニ、已利休死シテコノ石とうろうヲ印トナスモノ也、ユヘニ如此

云々、○高桐院客方ノワキニ名物袈裟の手水鉢□□美

別ニシルス、

一(八オ)

玉林院 開山 月岑和尚 有馬中務大輔

中之間 墨絵 山水 狩野探幽

礼之間 薄彩色山水 同 常信

且那ノ間 薄彩色七賢人四愛堂之図 狩野安信

衣鉢間 墨絵 琴棋書画 狩野洞雲

大書院 薄彩色松梅鶴之図 狩野探雪

西ノ間 墨絵 山水 狩野洞春

東 東二松二猿猴竹双鶴

西 枕戸 西じゃかう 沼津紹玄

南明庵 狩野栄川画

庭ニ南都在原寺ノ筒井ノ筒有之

又大秦太子建之砌ニ有之、石燈籠ノカタシココニアリ

玉林院塔頭 洞雲庵 一(八ウ)

大光院 開山 古溪和尚

間ノ画悉狩野永真筆也

中之間 墨絵 七賢人四皓

礼之間 同 夏之図荷葉芦雁

且那ノ間 同 秋之図山水人形

衣鉢間 同 冬之図山水

大書院 薄さいしき竹鶴

金竜院 開山 伝叟和尚 金森出雲守

間ノ画悉長谷川等伯筆也

中之間 墨絵 山水

礼之間 同 四愛堂

旦那間 同 大松

衣鉢間 同 山水

書院 同 大菊

東杵戸 彩色 芦鷺

西杵戸 紅葉鳥

昌林院 開山

中之間 墨絵 七賢人

礼之間 同 山水

旦那間 同 山水

衣鉢間 同 花鳥

狩野安信

同筆

同筆

同時信

「(九才)

大書院 同 艸之山水

又同等伯

此寺虫払別日ニ懸物ノ名物アリトイヘドモ人ニミセス近は

可認ナリ

芳春院 開山 玉室和尚 松平加賀守

間ノ画悉狩野探幽筆也

中之間 薄彩色祖師之図

礼之間 墨絵 獅子牡丹

旦那之間 薄彩色人形四愛堂

衣鉢間 墨絵 山水

大書院 薄彩色花鳥

白小書院 墨絵 山水

□ノ裏ニ吞湖閣アリ

右ニ拾四塔頭

寮舎

龍泉庵 開山 陽峯和尚

間ノ画悉狩野興以筆也

中之間 墨絵 西湖之図

礼之間 同 人形

旦那間 同 梅

龍光院 開山 江月和尚 北流

中之間 墨絵 から松列仙

礼之間 同 同筆

旦那間 同 真山水 同 等顔

衣鉢間 同 金山寺ノ図 同筆

「(九ウ)

衣鉢間 同 耕作  
大書院 同 柳牛

一間二枚折 彩色牡丹花下睡猫児片面

「(十才)

一間 彩色 一枚

一間 彩色 一面ハ竹二つる

一間 同 一面ハ岩ニ野雉

中之間 墨絵 松竹梅 狩野隆也筆  
礼之間 墨絵 花鳥 別所恕閑筆

此東間みな同筆也

旦那間 同 八景

衣鉢間 同 人形

大書院 同上

清泉寺 開基 実伝和尚 北流

中興大通智勝伝外左和尚塔所

間之画 悉長谷川等益筆也

中ノ間 薄彩色山水

礼之間 同 四愛堂

旦那間 同 琴棋書画

衣鉢間 同 山水

大書院 同上

寸松庵 開山 江月和尚 第二

此庵佐久間將監ノ物ズキニテ客殿小座敷等有之悉

心ヲツクセル也、尤異風也、○又林道春打付書之額条アリ

間ノ間 悉狩野探幽筆也

中ノ間 墨絵 曲水之図

礼之間 同 雪牛山水

旦那間 同 花鳥

小書院 同 人物

「(十一才)

梅岩庵 開山 天祐和尚 北流

天祐和尚生涯兼ル僧ニテフリシト也、小川ノ上ノ石橋古ヘナカリシヲ此

和尚通路ノ偏ヲナゲキテコレヲカクルト云、数々俗コレヲ天祐橋と云也、

「(十ウ)

孤蓬庵 開基 江月和尚

此寺小堀遠江守政一建立也、悉客殿書院等ものズキ

有之也、尤寸松庵出来ノ上ニテ建立ルガ故ニ一ヒヤウシヲ又キ

タルノ趣向見及候也、但此寺出来ノ上、寸松庵出来□□

□□□□か未分明也、打可聞正也、又客殿ノ次西ムキノトコ有之、

間之画

処々今ノ遠州ヨシダナヲ組合候らし、尤よしだな□□ハ□光ニ見分の□、此好ハ□□とハ別ナルカ○又此処手水鉢ノ□風を格別の趣向アリ、可見也、○又ラクニ二間六畳敷コレアリ、□ヲコノミノタクミナルコト□□為ス、

間ノ画悉探幽筆也

中ノ間 墨絵 山水

礼之間 同 獅子

旦那間 同 拾雪

衣鉢間 同 柳竹雀

二間ヲ三ツニワケ

仏殿真中に□コレハ下一まいノト□□板ニテ中ニ仏殿ヲ

(図) クミテ入レタルナリ、下ノ地板左右ヲキリテミュ、尤少シ

ラクニ入ルナリ、

(図) 但タタミシキ処如此カ不覚□□□

可正也

碧玉庵 開基 雪庵和尚 南流

中ノ間 中彩色 長谷川等顔

礼之間 同 同筆

旦那間 同 同 等與

大書院 同 同筆

衣鉢間 同 同 等益 一(十二才)

瑞源庵 開基 江月和尚 第二安室和尚塔所

一式 長谷川等益筆

高林庵 開基 玉室和尚 塔所

但此寺ハ片桐石見守建立也、尤其地 御所以遺藍ニ付、

御手伝被仰蒙候おり、上京被致候、次年ニ此客殿ヲ被遣候由、

尤御所ハミナ檜木作り也、故ニ余木ニマギレナキ様ニト皆

杉松木ノ全木ニテ被建候也、天井などニハモノズキヲ□□テ

紅ヲヌラレタリ、西東ノ間ニ床なく、付書院斗也、尤此

客殿出来の上、此西間ニテ碁子ヲ二度、石州被点候

由承及候、尤六畳敷かと覚り事 ○又此庵少シモ

物ズキナク、あらかの板ノ石ズへ自然石ノ丸キヲ以テ包ヲ□、

一(十二才)

又東ノ間ニ石州好ノ大ノ手水鉢アリ、其向ニ大孤石ニテ造レル

名高キ石とろう有之、つついニ敷石四つ五つ斗有之のミ、

客殿のゆへすべて砂也、他此石とろうのすがたニモノズキ

有之、能ク考□也。

又門ヲ入りテヤガテ敷ガワヲヨリ腰ニカケル付書院の様ナル僧の

待合処有之、此うしろの障子ヲ開へハ石とうろう見へり、処々  
すてるもの也、

中之間 墨絵 山水

狩野探幽

礼之間 同上

同 安信

旦那間 同

探幽

衣鉢間 同

同 益信

大書院 同

同 常信

「(十三才)

看松庵 開山 江雪和尚塔所

問之画 一式

主馬之筆也

常楽庵 開山 古溪和尚 細川越中守

問之画 一式 墨絵松竹梅

狩野永納筆

見性庵 開基 万江和尚

問ノ画 悉長谷川等益

中ノ間 墨絵 七賢人

礼之間 同 林和靖

旦那間 同 真山水

衣鉢間 同 山水

但此寺織田有楽斎好ノ蓬萊庭開作ナリ

「(十三ウ)

威徳院 開山 明叔和尚 法子 俊叟座元

玉雲軒 開山 天啓和尚

大源庵 開山 玉宗和尚

問ノ画 一式

長谷川等顔筆

瑞光院 開山 琢甫和尚塔所

「(十四才)

此寺大徳寺中ニハナシ、天神図子北ヨリ入口東ガハニ有之、

浅野弾正之故地山崎左馬允建之、浅野内匠頭

并四十六士之画像且石塔有之

又北に浅野いなりといふアリ、コレ又此寺ニ久クスルカ、

雲林院 何人ノ知ル処 大徳寺前ノ南東ガハ

往昔淳和帝之離宮也、帝崩御後、仁明天皇

賜之、常康親王に而付僧正遍昭、初為寺院、結

安居講、其後中絶、而元亨年中、賜此地大燈

国師再興旧地、属大徳寺堂宇、貞享年中炎上、

宝永四丁亥年、江西宗寛和尚勸檀越江都住人

上田氏政卿重与、雲林院奉大燈国師為開檀

「(十四ウ)

間之画 一式 彩色

狩野探信筆

如此ナルモノナリ

于時

天明五巳年八月念三日

瑞鳳山龍翔寺 開山 圓通大応国師南浦和尚

往昔在西京安井村、開山大応国師卵塔与

後宇多帝御廟相兼、旧記曰、天皇賜御髮

斯地、老国師録天皇屢回法要、国師化去哀

慕不已、為勅建梵刹于安井村賜名龍翔寺

経応仁乱殿堂荒之後、前大徳春浦和尚再

營天文十一寅年依于世忽劇天啓和尚奏

朝移于大徳寺中御廟及嘉陽門院之厝

開山祖塔於不移而故旧跡事龍翔寺徒

大徳寺兼領之祭祀不怠漫矣、

配當六十三石五斗壹升四合五勺

中ノ間 墨絵 花鳥

小栗宗丹

礼之間 中彩色花鳥

小栗宗栗

「(十五ウ)

安永六丁酉年十一月初五日 改書之

紫野玉林衲下 十藏定判

右之書千認得齋宗室予ニコレヲミセシム

因テコレヲウツスモノナリ、但反意按等、東々完調立アラく

東々完達写之

「(十六才)

(十六ウ・裏表紙)



Hakuso Soshitsu (1770-1826) who was the first son of Sekio Soshitsu, the 9<sup>th</sup> generation of Urasenke school. Hakuso Soshitsu was 16 years old then, and he later succeeded the 10<sup>th</sup> generation. That original document was also copied by the priest of Orin-in, one of the subtemples of Daitoku-ji. So this document is proved to be recopied twice.

Hayami Sotatsu was a capable disciple of Yugensai Itto, the 8<sup>th</sup> generation of Urasenke school and of Fukensai Sekio, the 9<sup>th</sup> generation of Urasenke school. Furthermore, Sotatsu attended as an observer when Hakuso succeeded to the 10<sup>th</sup> generation. It is widely known that Sotatsu, together with Kano Soboku, the fellow disciple, fostered Hakuso

The characteristics of this document are as follows;

- ① Information only described in this document.
- ② Information described in this document and its similar documents, “Murasakino Daitoku-ji Meisai-ki”
- ③ Different information from the most reliable document, “Hozan Shiso”.
- ④ Information about the painter who made some revisions to the original paintings.

.As I reviewed five other documents, I found some coarseness and fineness in the contents of each descriptions. It is possible to clarify the six documents into three groups. To enhance the value of each reference, there needs to research more systematically, and we should find more documents about the paintings of sliding screens of subtemples of Daitoku-ji, and should keep reviewing them continuously.

## SUMMARY

# “Ryuhozan Daitoku-ji Keidai narabini Shotatchu Zakki (Miscellaneous Notes about Ryuhozan Daitoku-ji Compound and its Subtemples)”, transcribed by HAYAMI Sotatsu-about the painters of the pictures owned by subtemples of Daitoku-ji and some information-.

Yoshihisa SUGIMOTO

It has been reviewed and discussed about the painters of Fusuma-e (paintings on sliding screens) owned by subtemples of Daitoku-ji (the head temple of Rinzaï sect Daitoku-ji school), located in Murasakino, Kita-ku, Kyoto city, based on the following documents in Edo period; “Hozan Shisho”, “Murasakino Daitoku-ji Meisai-ki” and “Miyako Rinsen Meisho-zue”. However, it is already pointed out by Doi Tsugiyoshi that other similar documents are existed. Basically, I should take up all the documents as far as I know, and should review each of their characteristics critically.

Here in this thesis, I ‘d like to reproduce and show “Ryuhozan Daitoku-ji Keidai narabini Shotatchu Zakki” owned by Tohoku University Library and clarify the characteristics of the contents with comparison of some other documents.

This document was transcribed by Hayami Sotatsu on August 23<sup>rd</sup> in 1785.. Hayami Sotatsu (1740-1810) was born in Kyoto as a son of Hayami Gentatsu who was a doctor. Sotatsu learned tea ceremony under Itto Soshitsu, the eighth head of Urasenke school and expounded its theory and history. His major literary works include “Chashiryaku” (1811), “Kissashishohen” (1825) and “Chasoku” (1858). “Ryuhozan Daitoku-ji Keidai narabini Shotatchu Zakki” is not only copied the name of the painters of the sliding screens but also wrote additionally about the stone lanterns and tea shelves created by the tea masters in Momoyama Period.

The details of this document have been written in the postscript. Sotatsu was given the original document of “Ryuhozan Daitoku-ji narabini Shotatchu Zakki”. by